

北雪美談

時代

加賀見

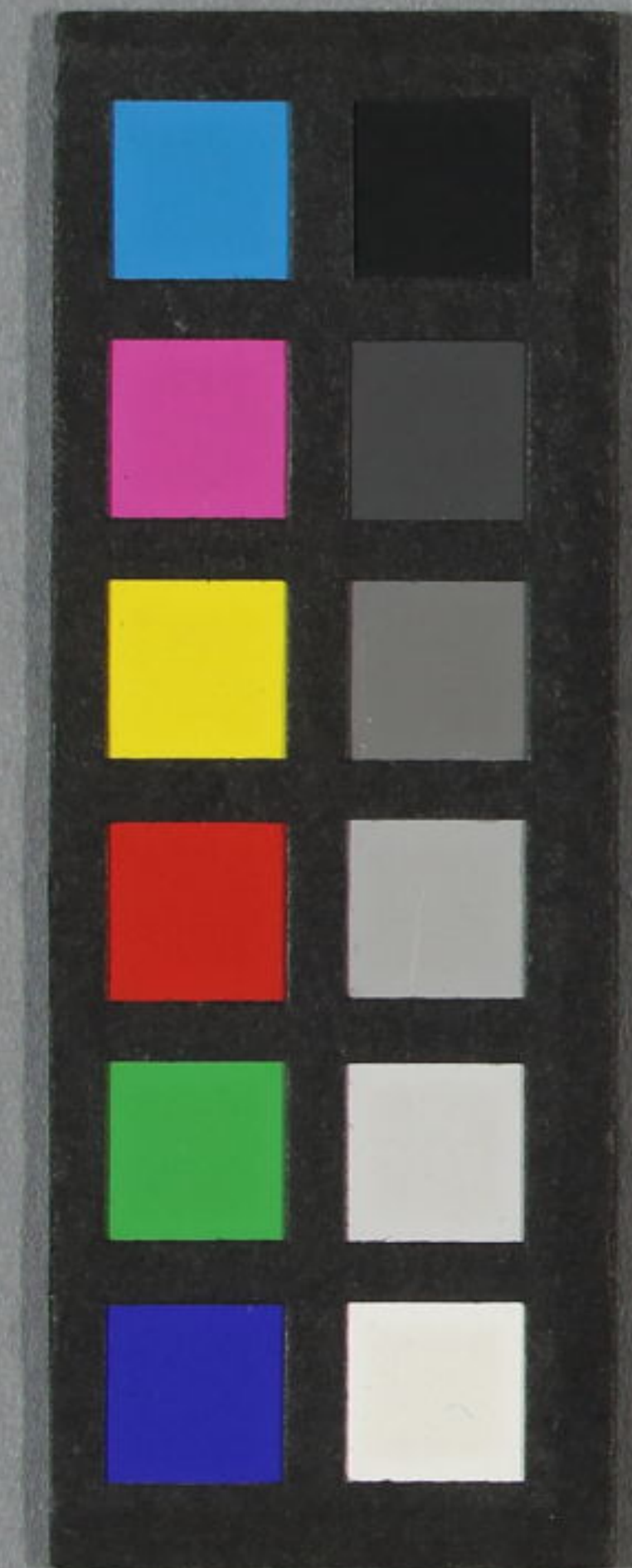
第四編

春水作

國貞畫

若林堂文庫

~ 13
3756
2



北雪美談  
 時代鏡  
 卯鐘十集  
 春水集  
 翠鳥圖  
 瓶原  
 若林蓮  
 新辰  
 新辰

北雪美談  
 時代鏡  
 卯鐘十集  
 春水集  
 翠鳥圖  
 瓶原  
 若林蓮  
 新辰  
 新辰



北雪  
美談  
時代加々見

辰の  
新牌史

四編下



若永亭の作  
一壽齋國貞画

乃林堂  
寿梓

四編上



為永春水作  
秋川國貞画

五編下

新古今和歌集

北雪  
美談時代加々見

若林堂  
壽梓

五編上



北雪  
美談  
時代鏡

名  
美新板

若水作

若林

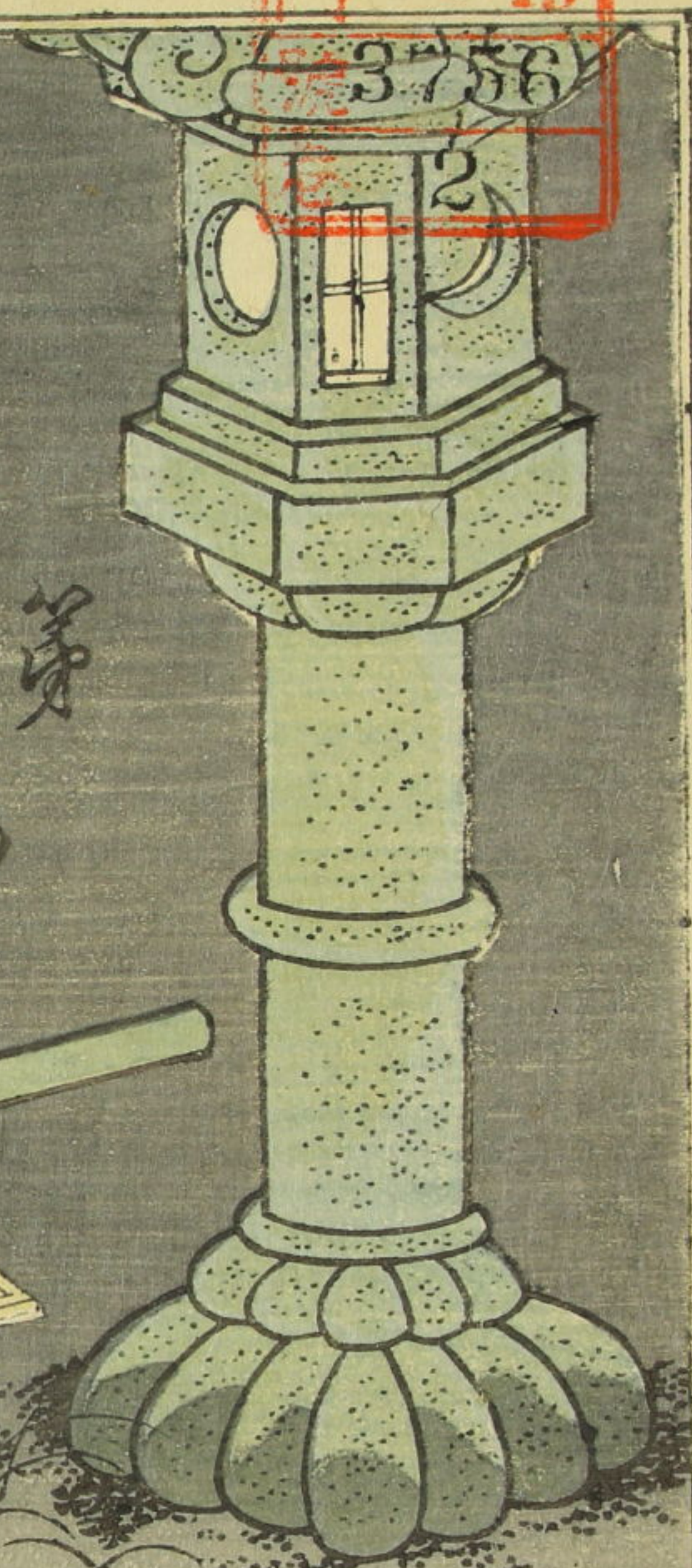
司

一秀  
國貞

外題曲多國

上編六

六編下

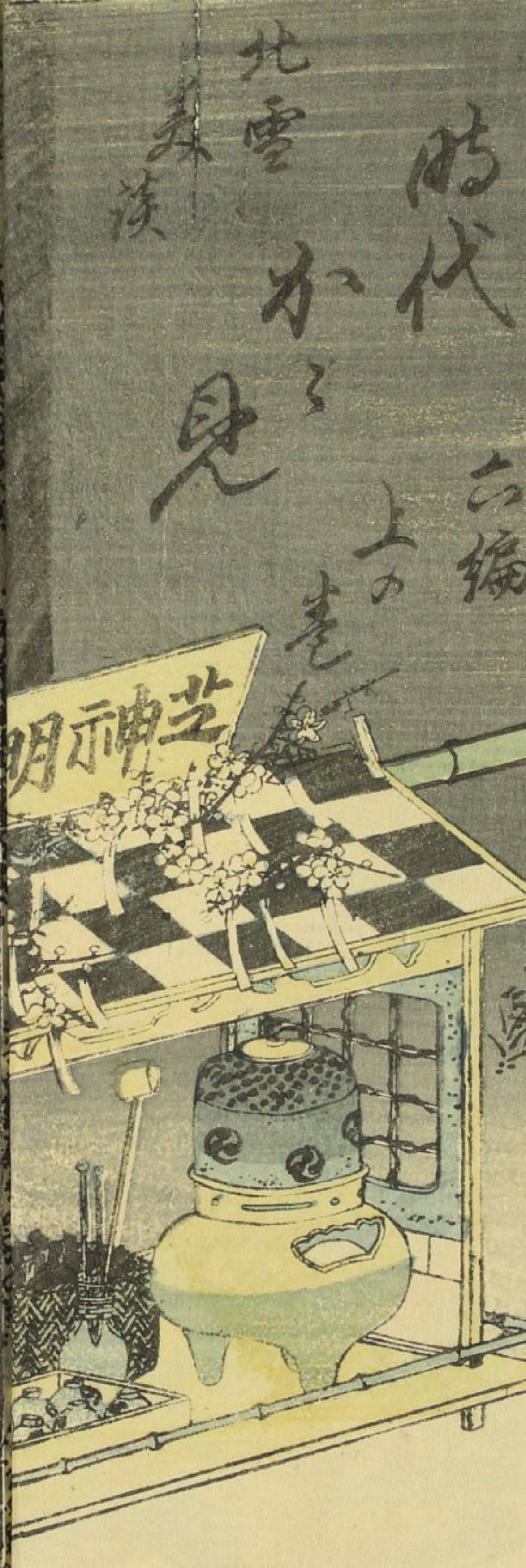


水化

國貞畫

以林堂

壽梓



時代  
北雪  
見  
美淡

裨官者流の根原ハ那蒙人の



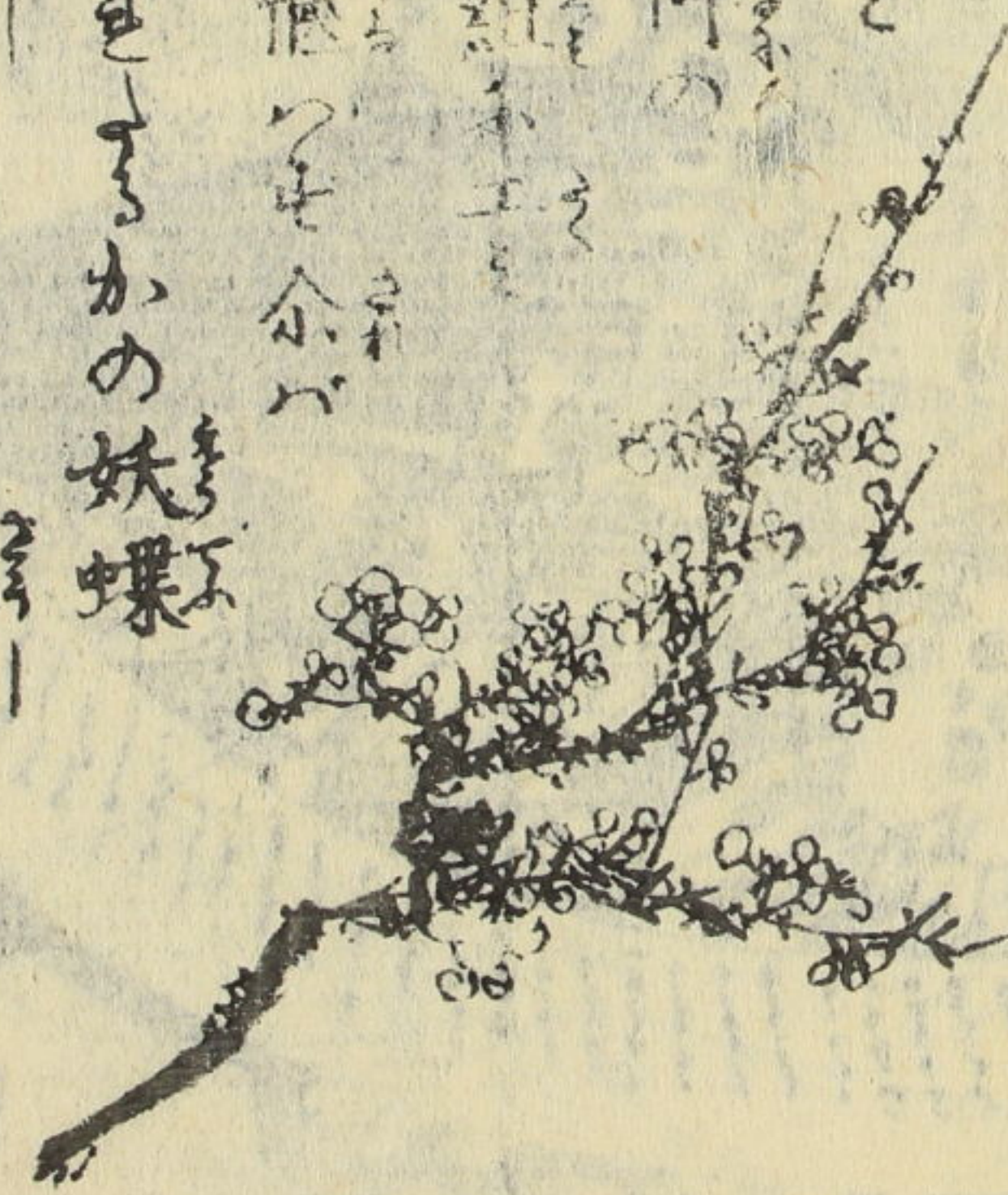
善惡勸懲試旨と  
此れハ近き爲の画双紙ハ或ハ何の  
妖術と云奇々怪々の條紙設て車組本工  
婦幼稚童の御意ハ憚り申合ハ

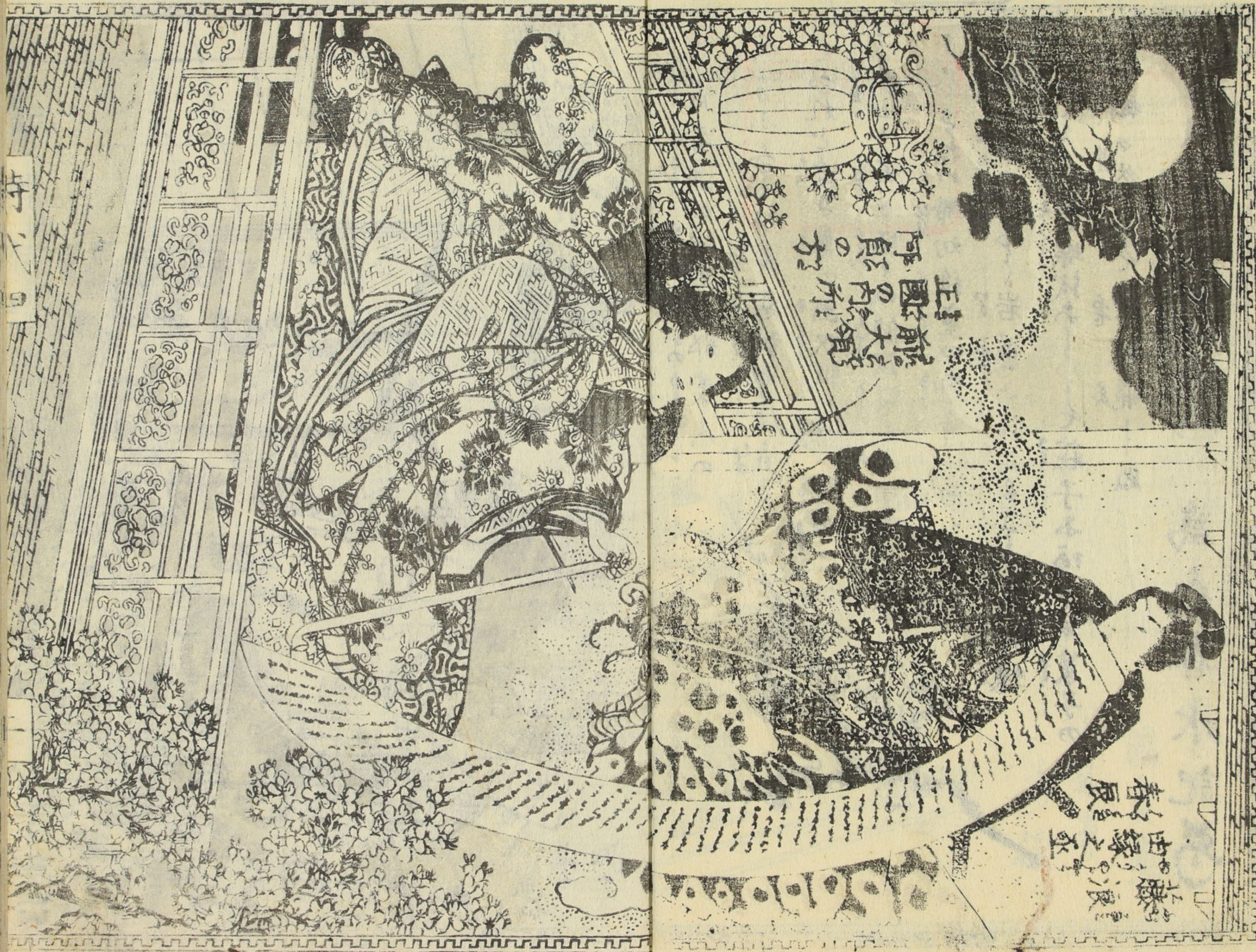
由縁ハ夢の中より若藤小授ら色するかの妖蝶  
の一段より只管蝶紙ありハ一々莊子小何々鬼策子の  
上小棚々然と一々筆紙飛一收

安政三年丙辰陽春



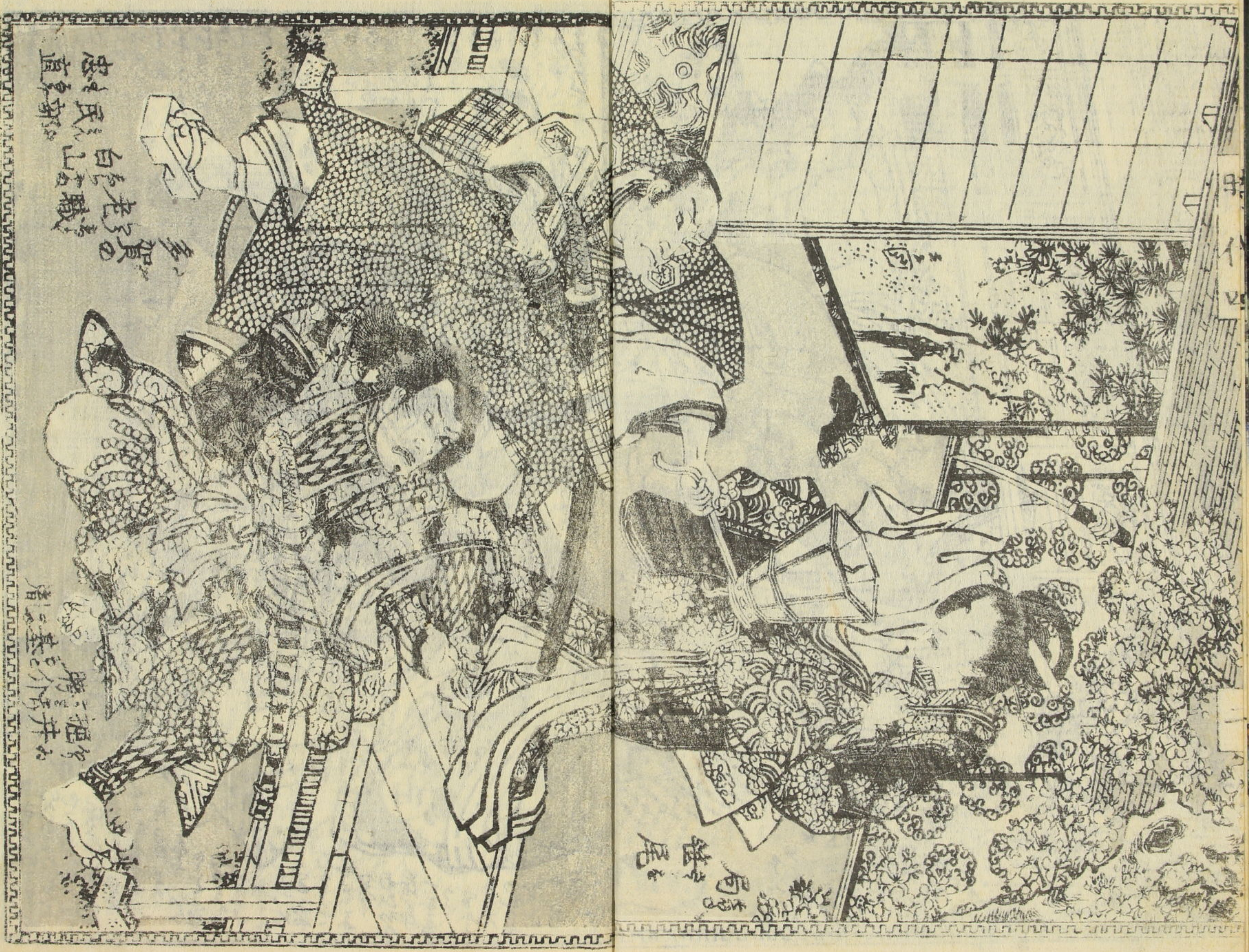
烏永春水記焉





正 前  
大 鏡  
阿 郎  
の 所  
が

藤 浪  
由 縁 之 丞  
春 辰



局  
磁  
尾

多賀の  
老翁  
白石  
忠民  
直多

勝  
田  
井  
小

此  
心  
也









あつち  
のきんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

異変と聞て  
群臣多賀の  
館に馳集る

寺二句

ついでに  
あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

牛  
牛  
牛

牛

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また

あつちの  
きんぎょ  
はしるあ  
まのこ  
また





寺  
ノ  
イ  
ノ

①  
おのれ  
る  
を  
記

そのまゝのま  
とあつたあつて  
まゝで

おのれ  
を  
記

おのれ  
を  
記

そのまゝのま  
とあつたあつて  
まゝで  
おのれ  
を  
記  
そのまゝのま  
とあつたあつて  
まゝで

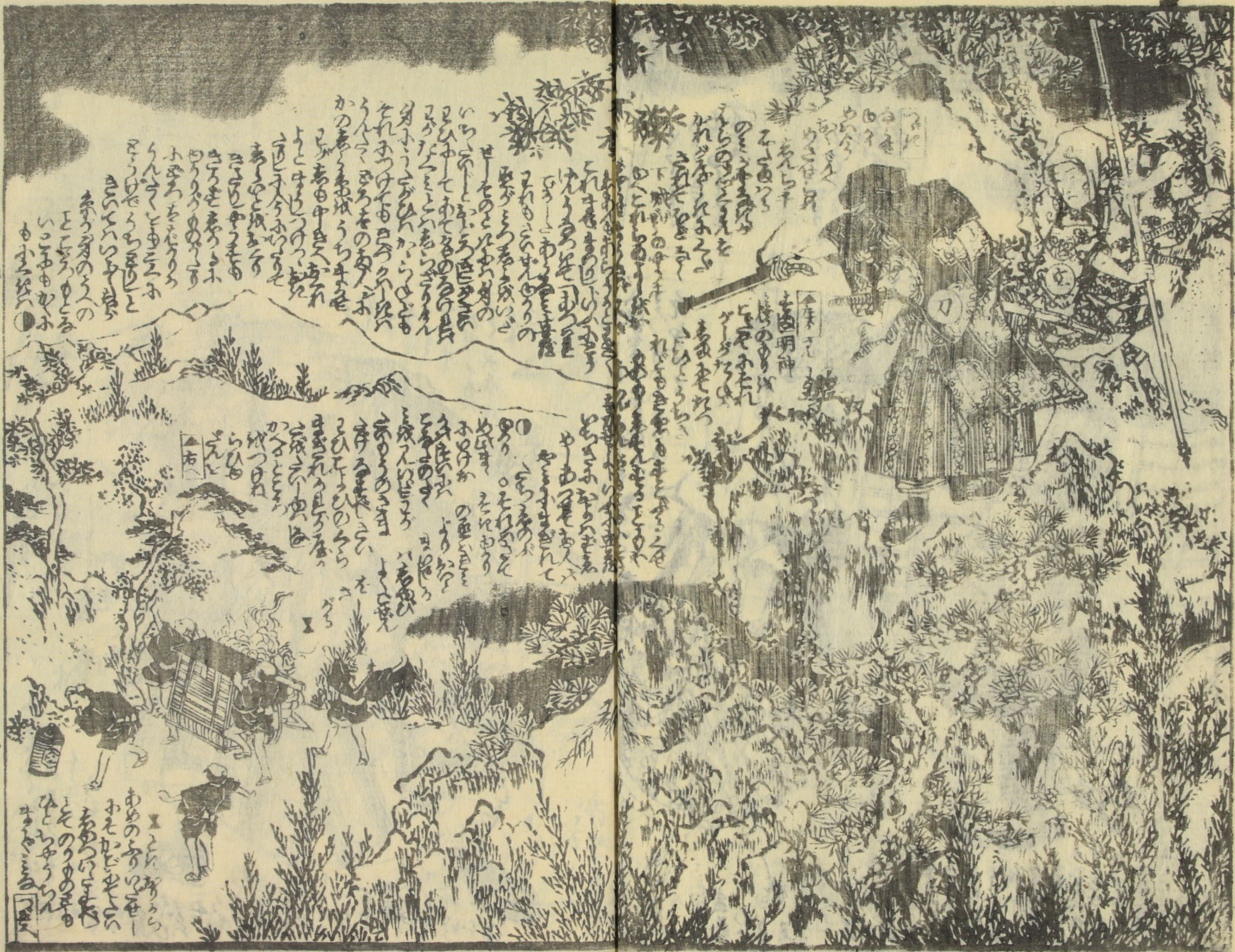


つれ  
おのれ  
を  
記

おのれ  
を  
記

おのれ  
を  
記

そのまゝのま  
とあつたあつて  
まゝで  
おのれ  
を  
記  
そのまゝのま  
とあつたあつて  
まゝで



いらいとてわてるものなり  
ふかたなるものなり  
それゆへにわてりて  
かたもあつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて

あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて

あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて

あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて

あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて

あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて  
あつちまを  
よとまじつて

寺  
七  
コ





上の巻を  
ついでに  
さうして  
いふは  
さうして  
いふは  
さうして  
いふは  
さうして  
いふは

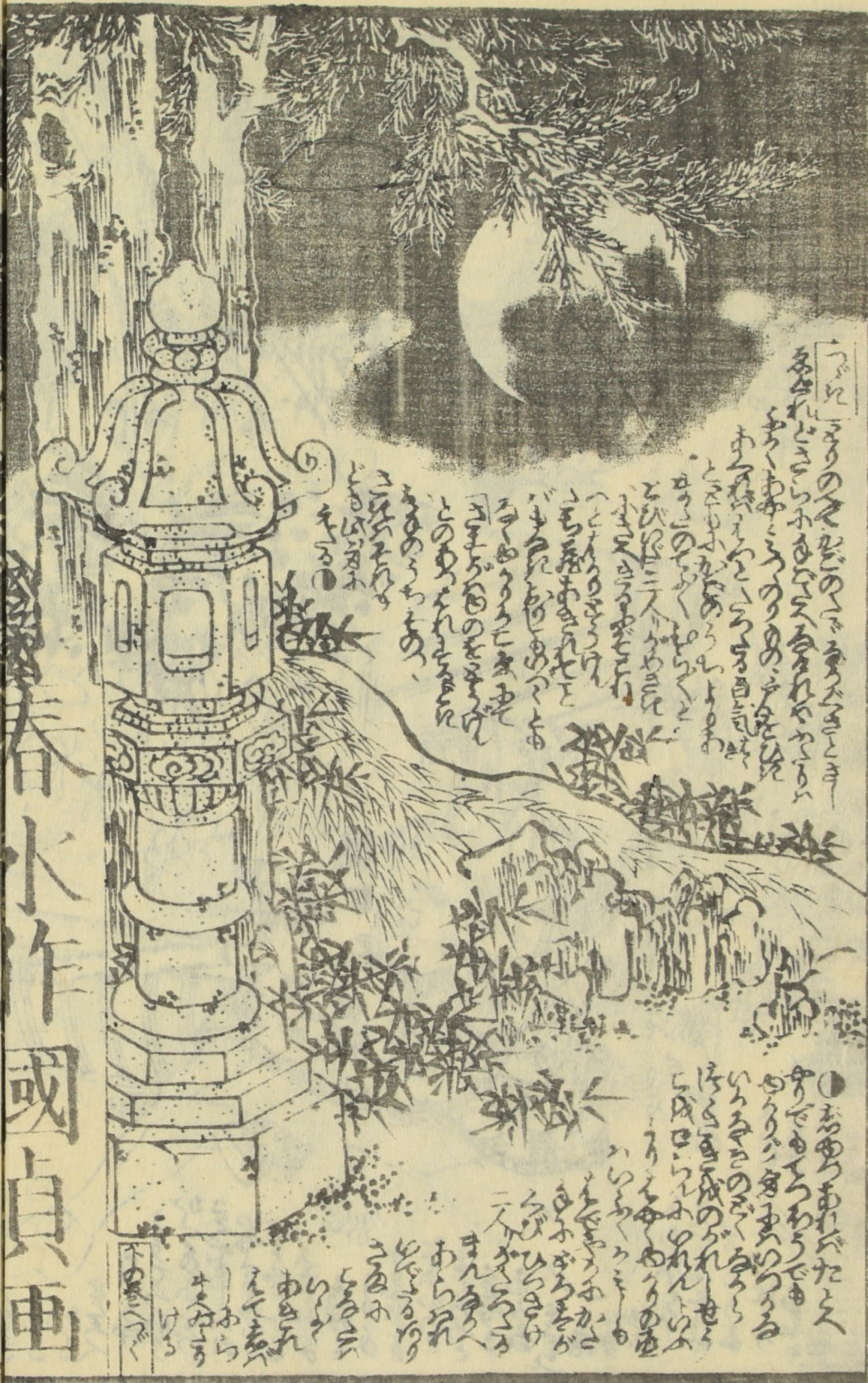
●わがまきりしはふ  
あつた  
●

●さうして  
いふは  
さうして  
いふは

さうして  
いふは  
さうして  
いふは

鳥屋慢助  
の  
女児思  
つ  
曉毎小鶏の  
形相を  
緋の後の篇  
小妻

●さうして  
いふは  
さうして  
いふは



時  
代  
四

さうして  
いふは  
さうして  
いふは  
さうして  
いふは  
さうして  
いふは

十

●さうして  
いふは  
さうして  
いふは  
さうして  
いふは  
さうして  
いふは

●さうして  
いふは  
さうして  
いふは

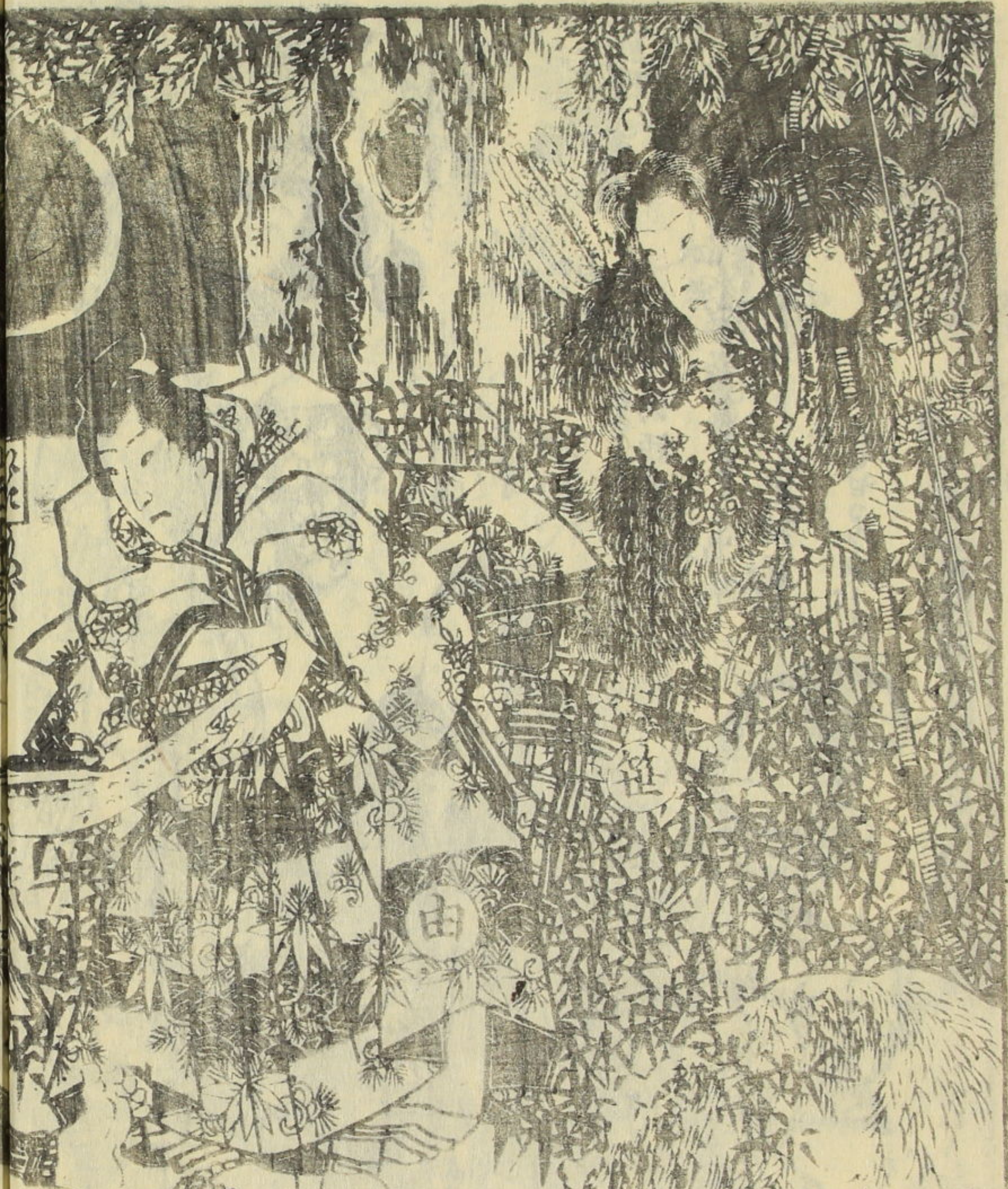
春  
水  
乍  
或  
貞  
画







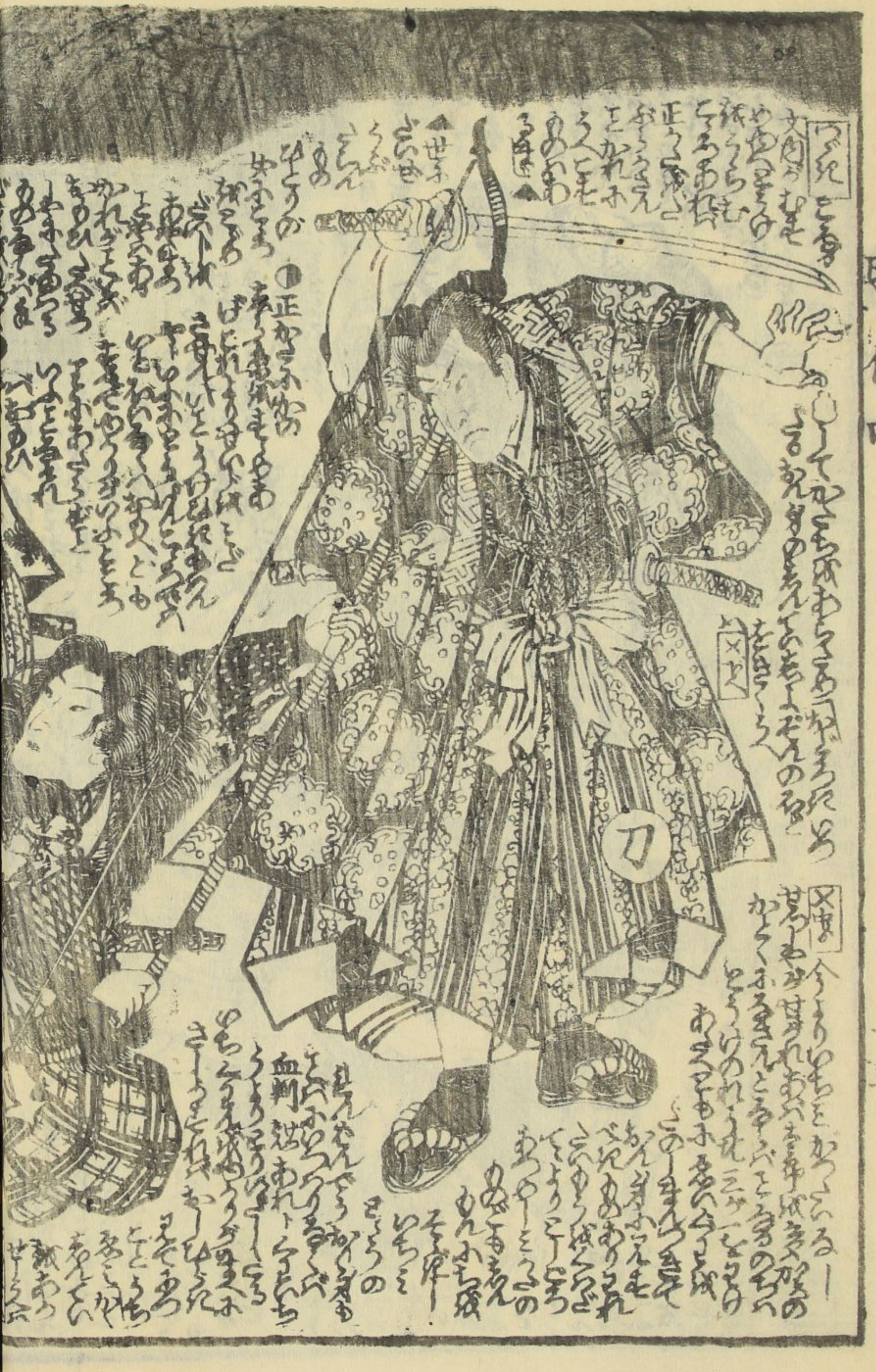




いづれは... (Vertical text on the right page, including the character '由')



いづれは... (Vertical text on the left page, including the character '刀')

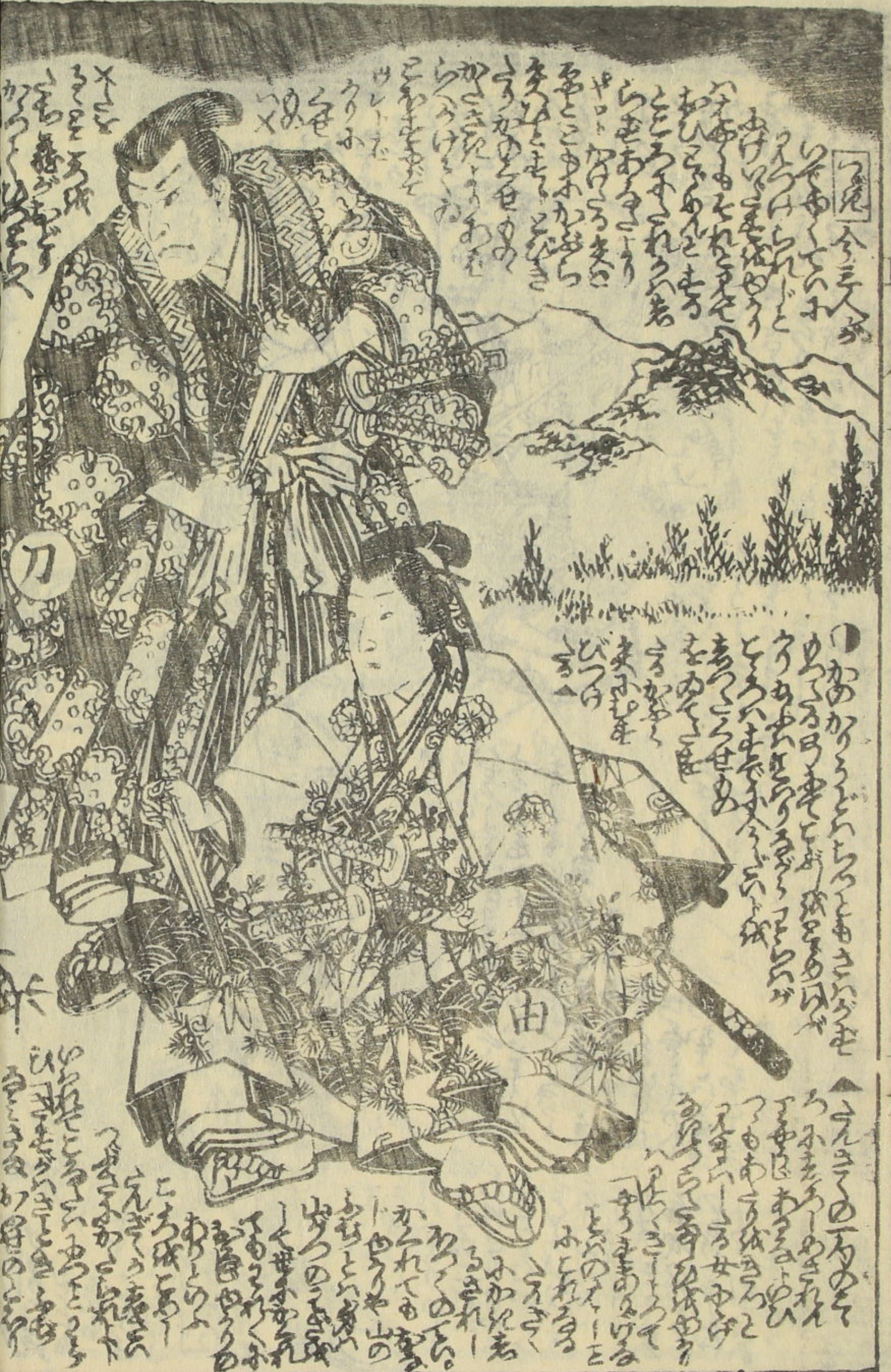


Extensive handwritten text in kuzushiji script is scattered throughout the pages, providing commentary or dialogue for the illustrations. The text is written in a dense, cursive style characteristic of Edo-period woodblock prints.



十一

十一



甲子四

十六

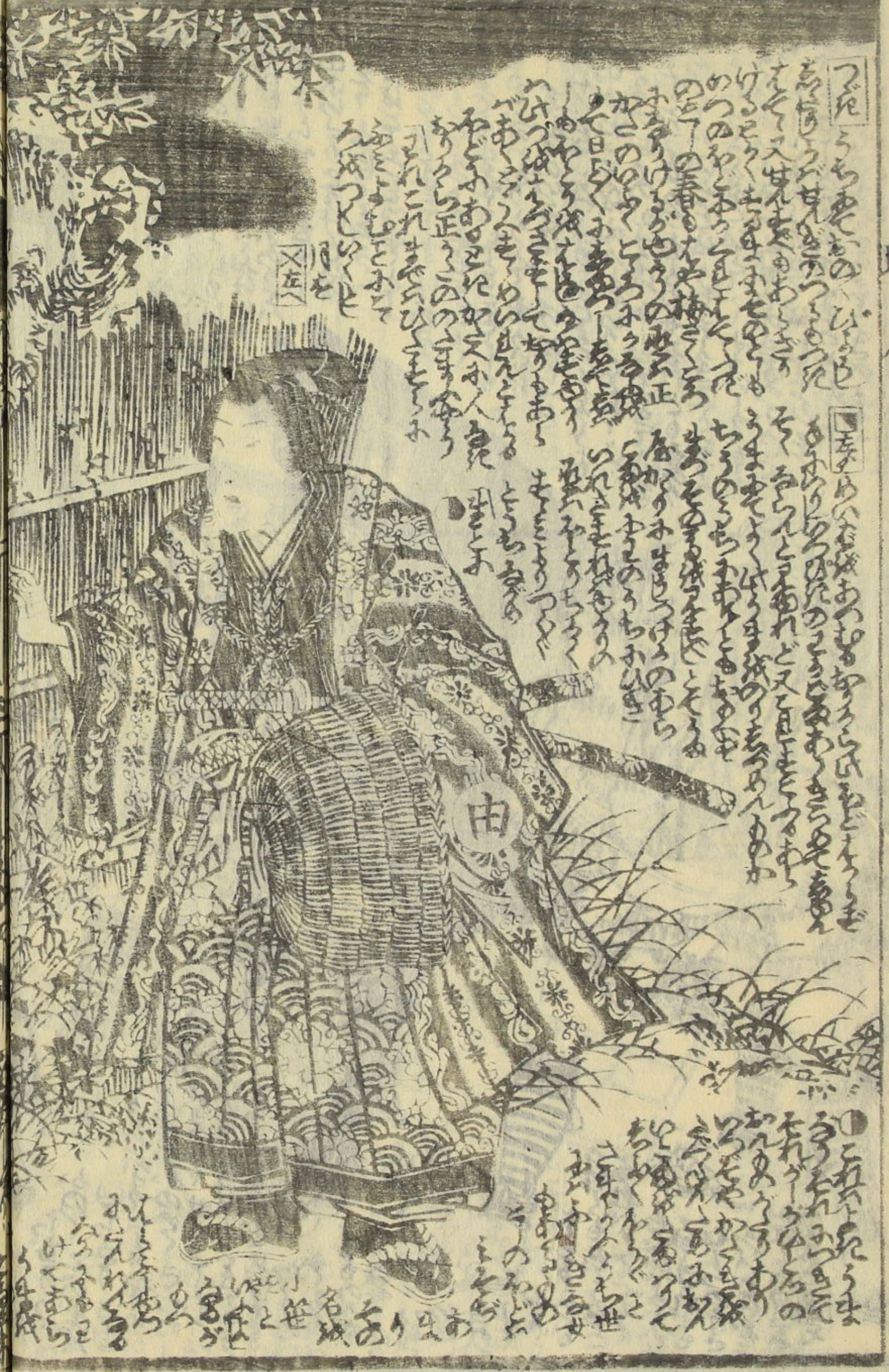




五世のまゝあつた  
のゝつちあつた  
るゝつちあつた  
れゝつちあつた  
ゆゝつちあつた

馬  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた



あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた  
あつた

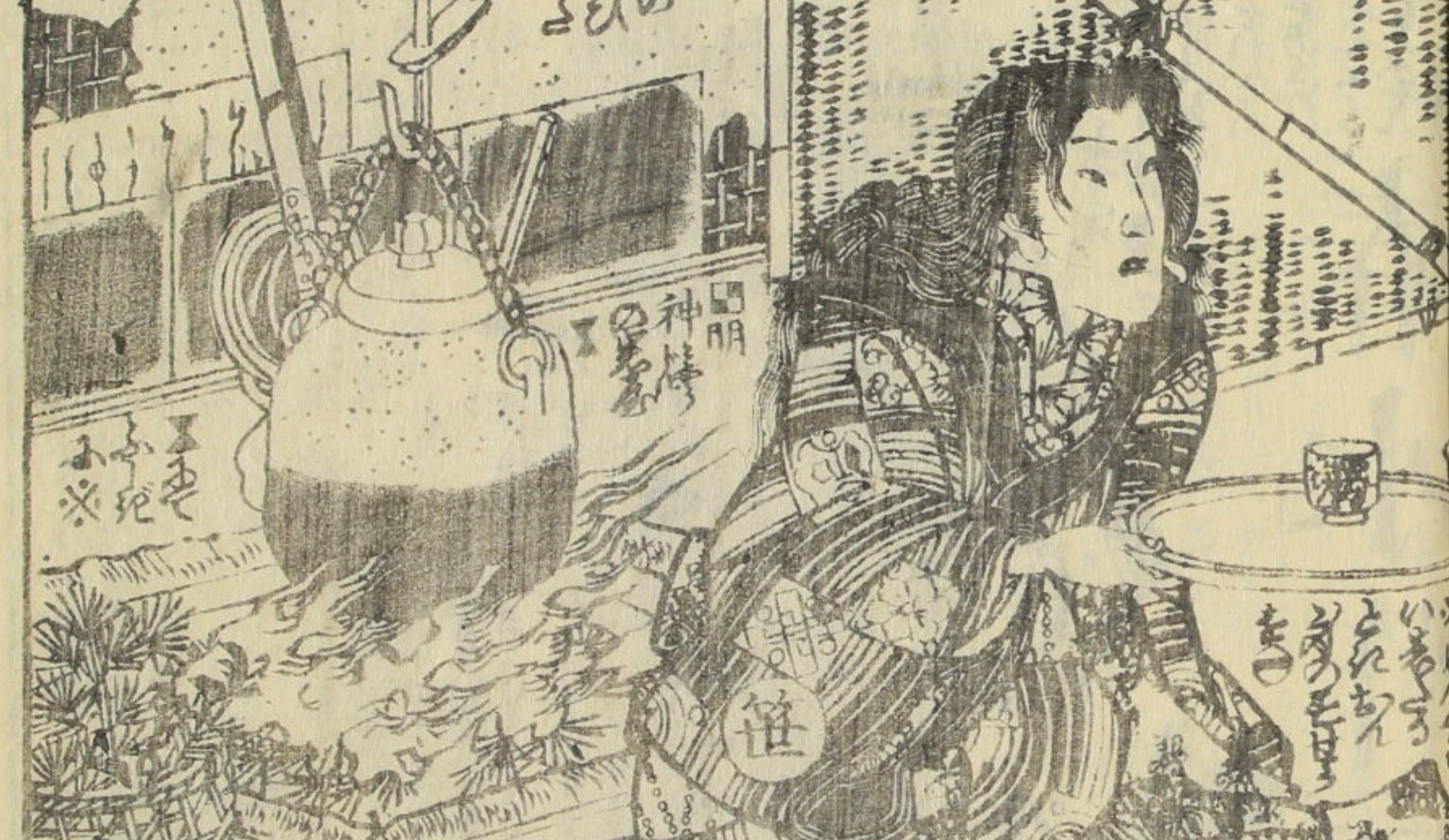


Handwritten text in the upper right section of the right page, likely a commentary or dialogue related to the scene below.



Handwritten text in the lower right section of the right page, continuing the narrative or commentary.

Handwritten text in the upper left section of the left page, providing context for the scene.



Handwritten text in the lower left section of the left page, continuing the narrative or commentary.



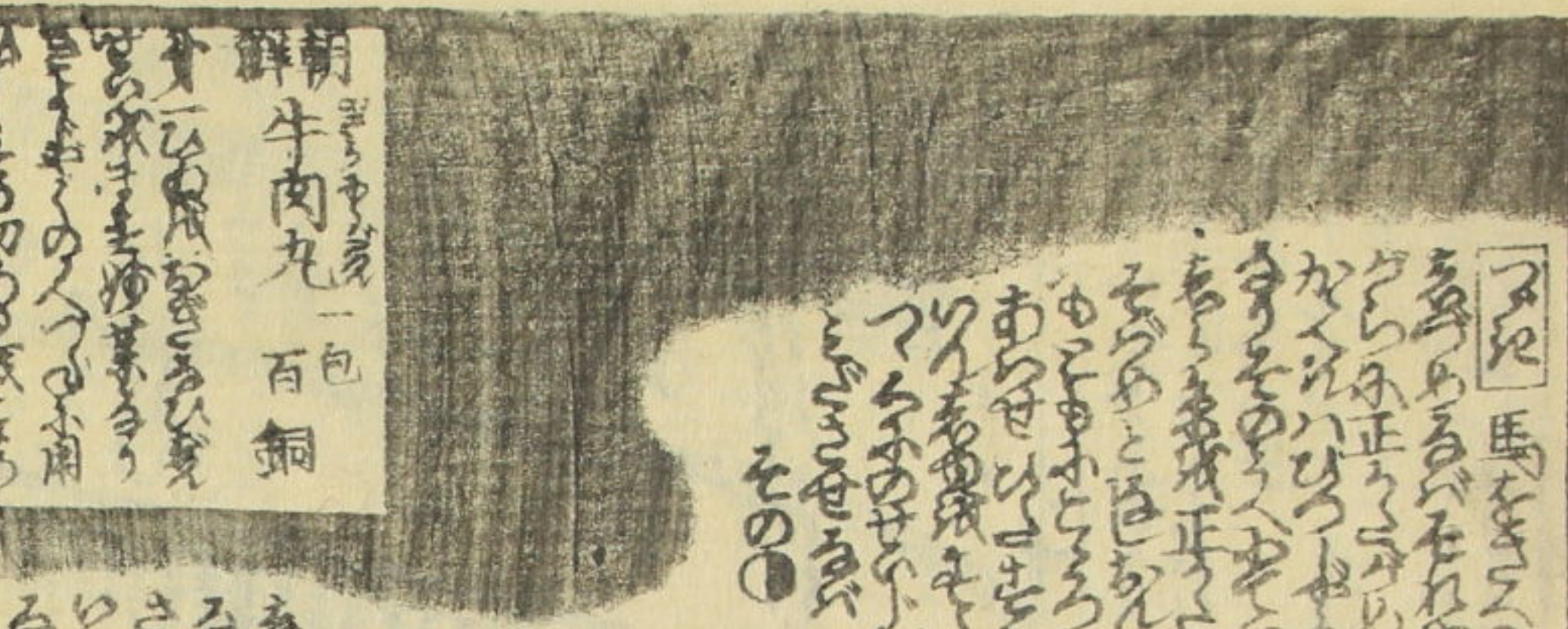
中納言

為永春水誌  
安政三年辰丑春露市  
聊光と出さる



通へど硝子鏡の最薄に冊子...  
淡々... 結び合せ...  
身成次見の員返ら...  
鏡の大き... 類自惚鏡...  
袖見物の曇らぬ鏡...  
聊光と出さる

春水作國貞画



朝牛肉丸 百銅

馬を... 春水... 國貞...  
その...  
白...  
春水作國貞画





寺

大正  
領方

止方  
新根の方

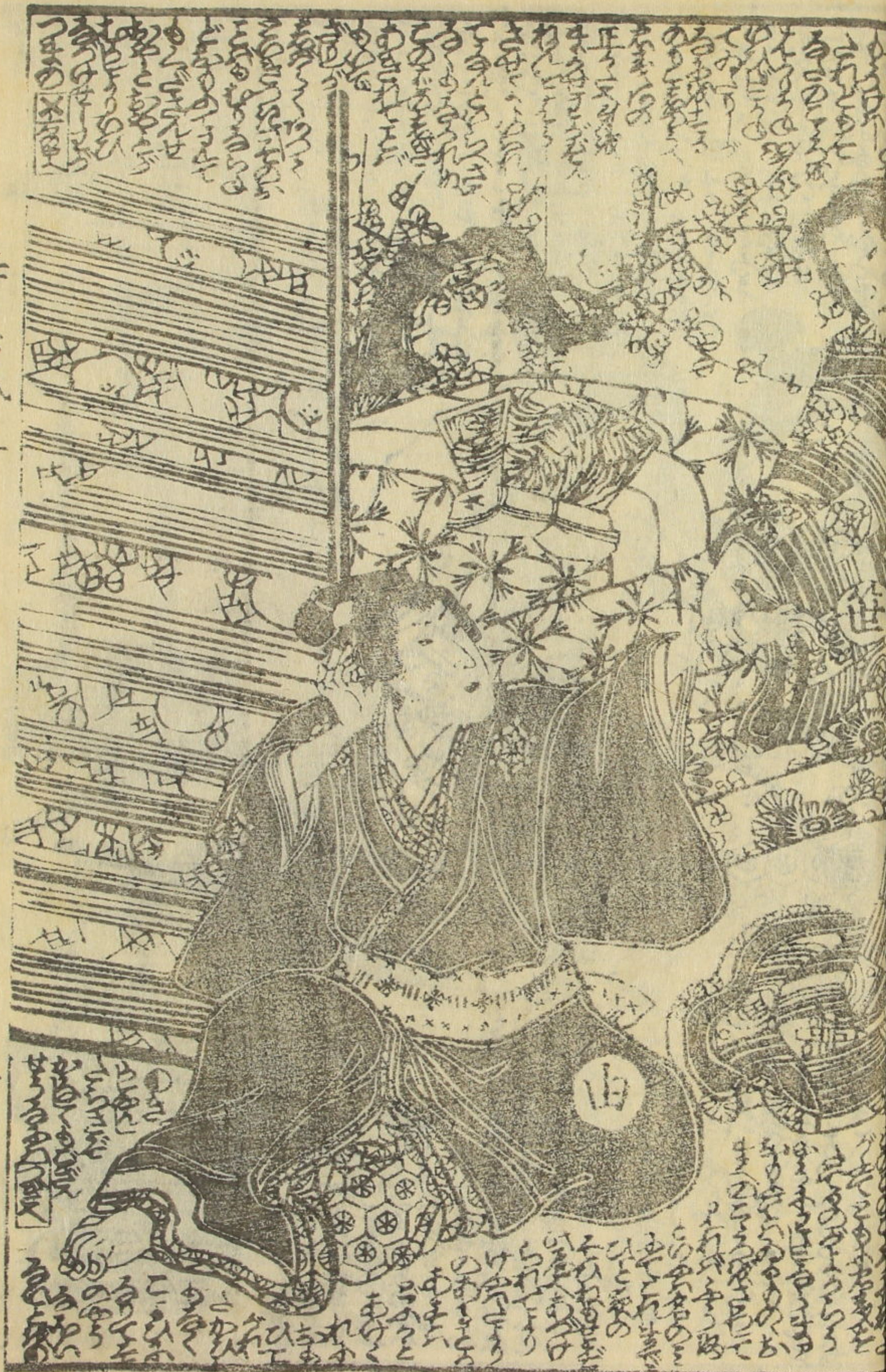


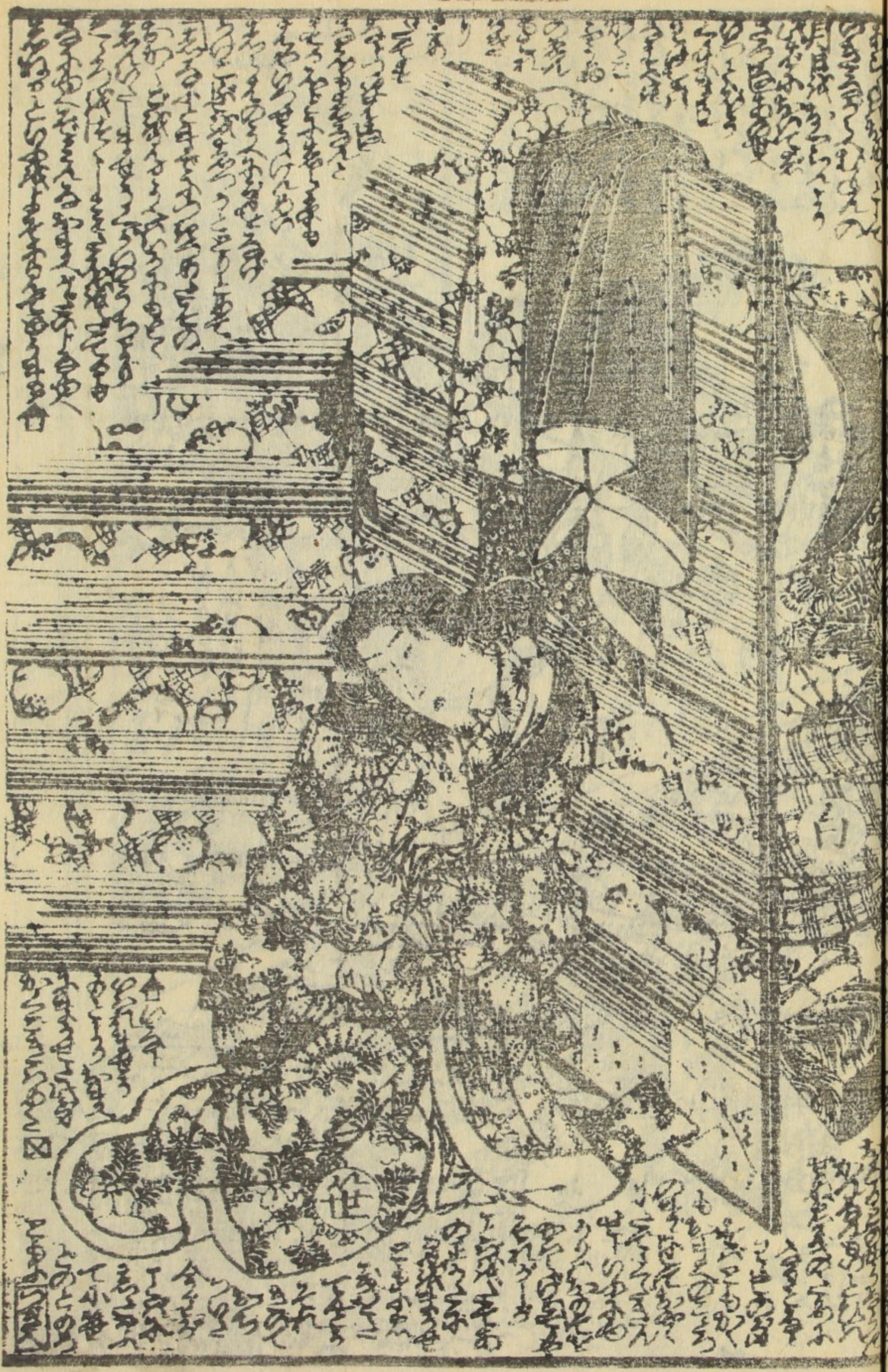
白願城

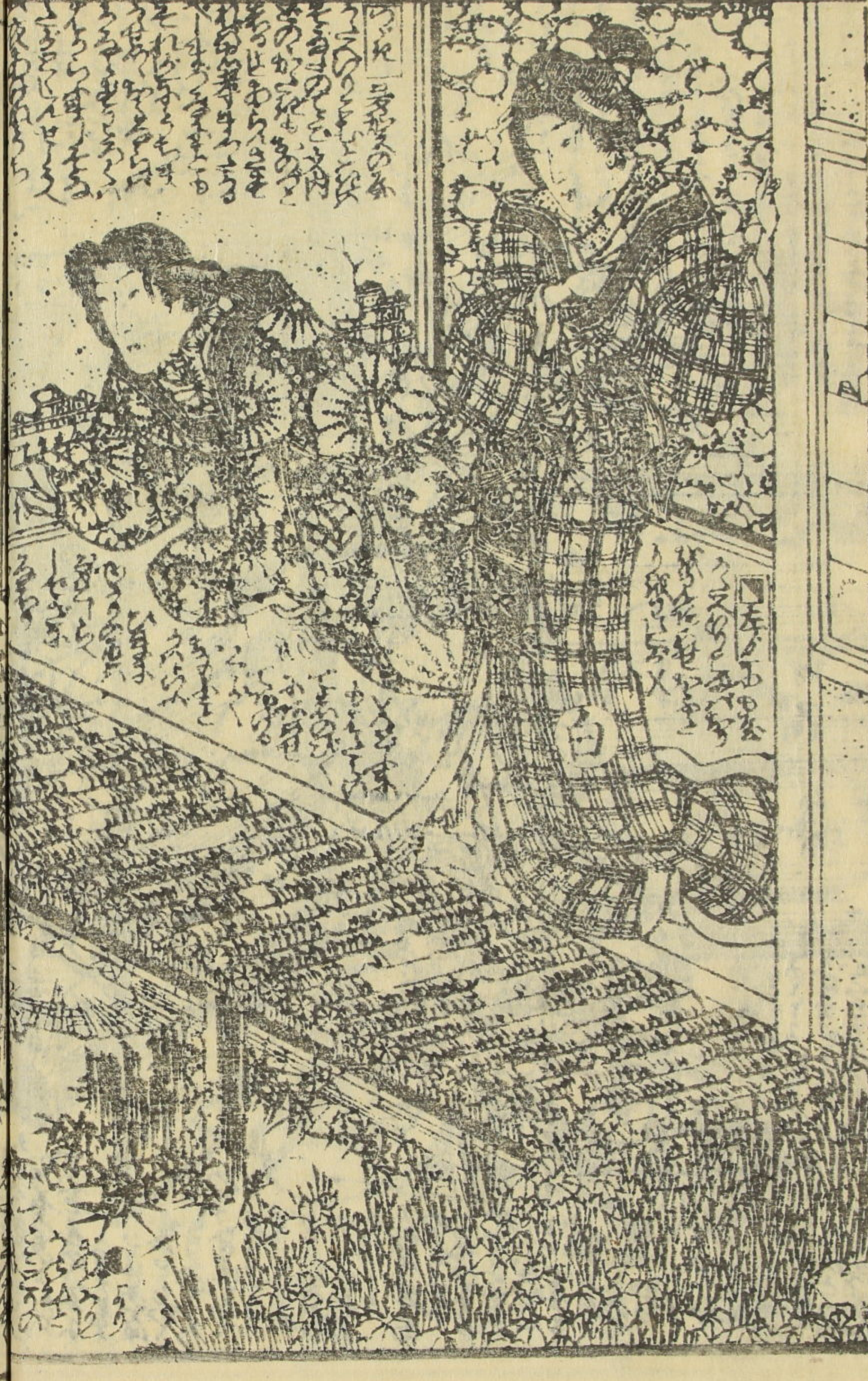


Handwritten text in vertical columns, likely a narrative or commentary, surrounding the illustration on the right page.

Handwritten text in vertical columns, likely a narrative or commentary, surrounding the illustration on the left page.



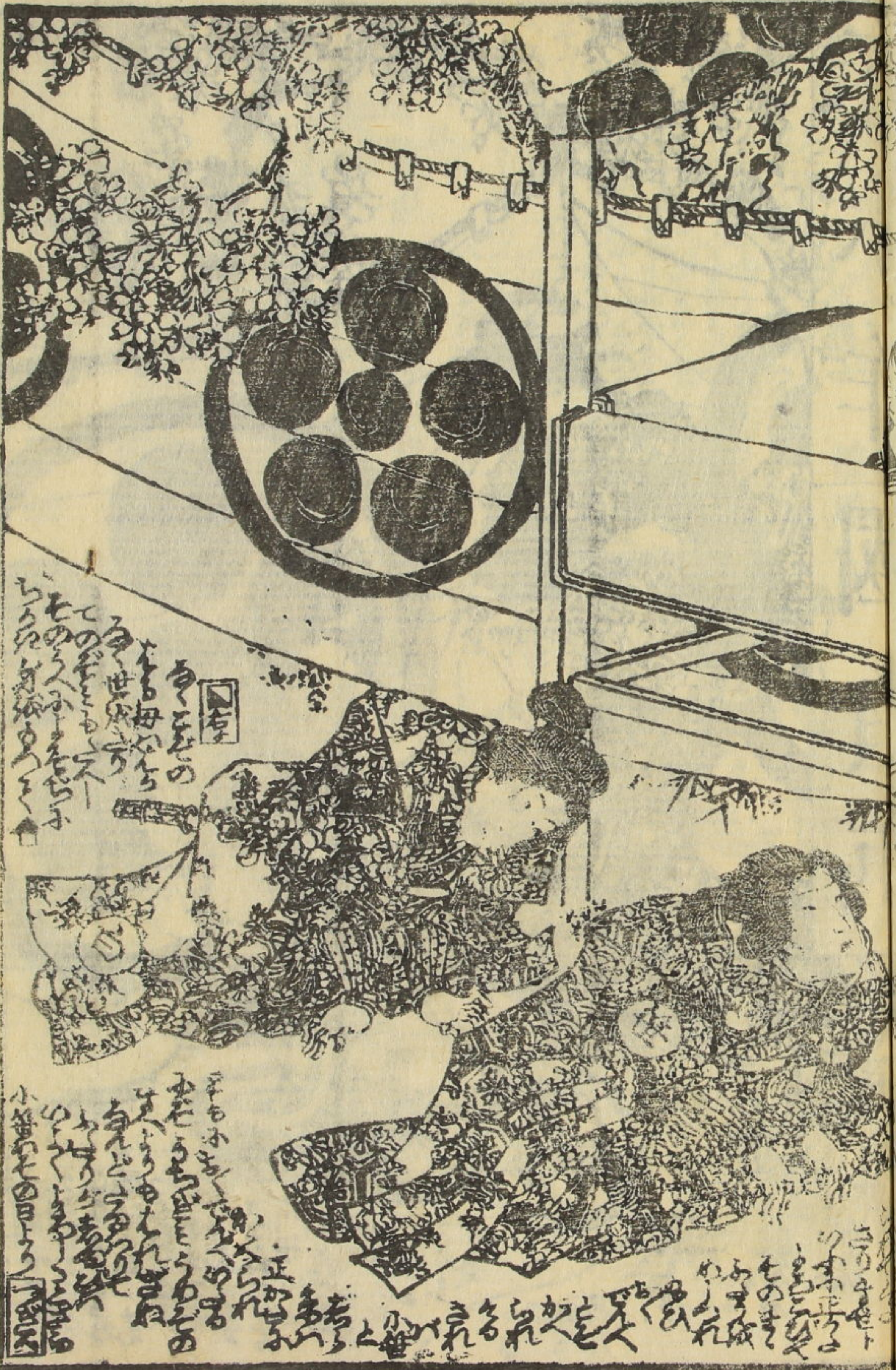






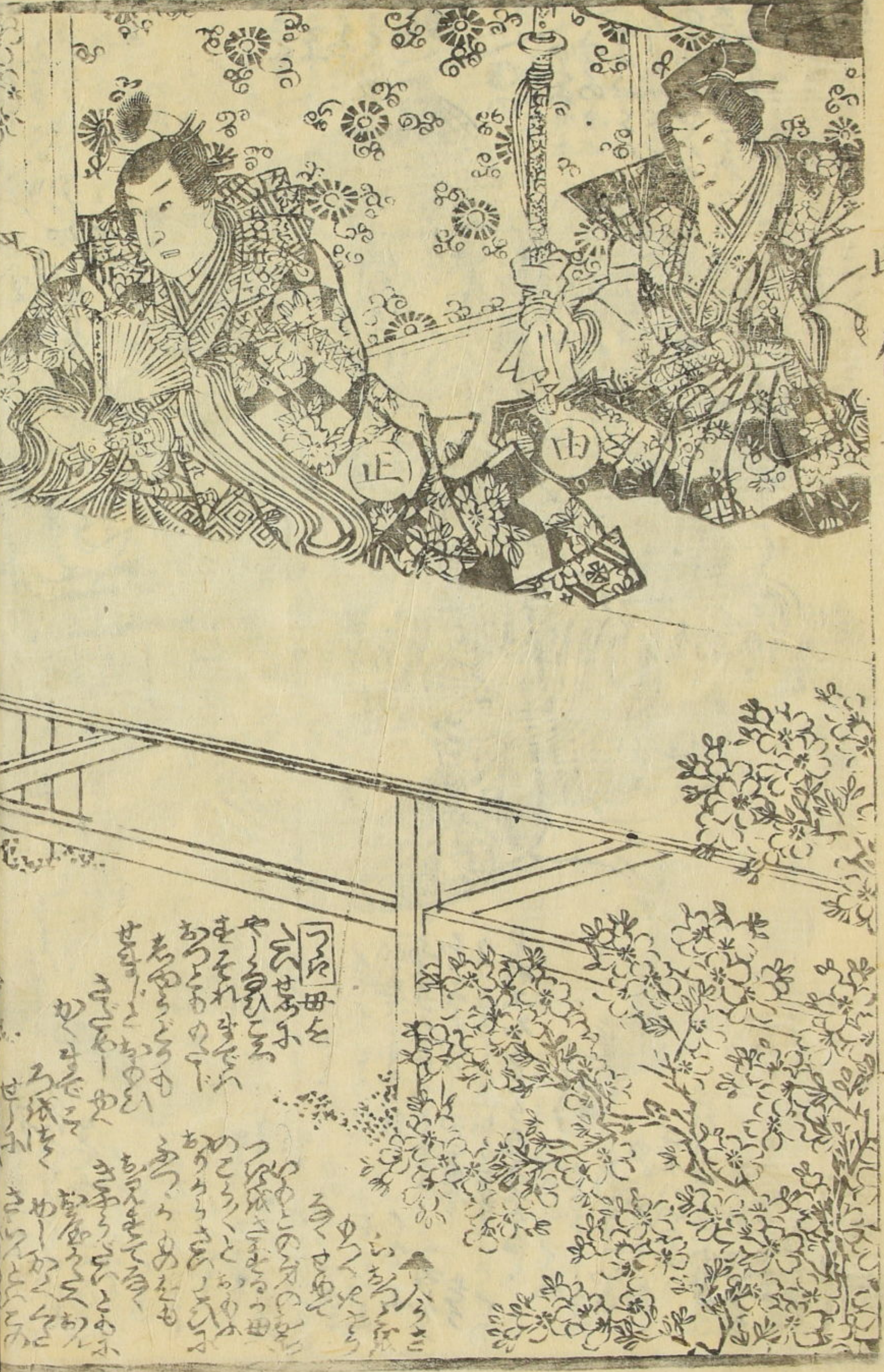






寺  
 七  
 五  
 七のうらまをもち  
 てる世にうらま  
 なる世にうらま  
 なる世にうらま

寺  
 七  
 五  
 七のうらまをもち  
 てる世にうらま  
 なる世にうらま  
 なる世にうらま



寺  
 七  
 五  
 七のうらまをもち  
 てる世にうらま  
 なる世にうらま  
 なる世にうらま

寺  
 七  
 五  
 七のうらまをもち  
 てる世にうらま  
 なる世にうらま  
 なる世にうらま



寺  
七  
五

白糸更  
根と喚ぶ

世尾と



甲  
七  
五

ついで中老  
の尾根と申す  
名根つと申す  
白根つと申す  
白根つと申す  
白根つと申す  
白根つと申す  
白根つと申す  
白根つと申す  
白根つと申す  
白根つと申す



此の鳥は  
 鶴と云ふ  
 鶴は長生  
 の鳥と云ふ  
 故に鶴を  
 飼ふ人は  
 長生を望  
 むと云ふ  
 此の鳥は  
 鶴と云ふ  
 鶴は長生  
 の鳥と云ふ  
 故に鶴を  
 飼ふ人は  
 長生を望  
 むと云ふ



此の鳥は  
 鶴と云ふ  
 鶴は長生  
 の鳥と云ふ  
 故に鶴を  
 飼ふ人は  
 長生を望  
 むと云ふ  
 此の鳥は  
 鶴と云ふ  
 鶴は長生  
 の鳥と云ふ  
 故に鶴を  
 飼ふ人は  
 長生を望  
 むと云ふ





Handwritten text in a cursive style, likely a commentary or poem related to the illustration. The text is arranged in vertical columns on the right side of the page.



Handwritten text in a cursive style, likely a commentary or poem related to the illustration. The text is arranged in vertical columns on the left side of the page.



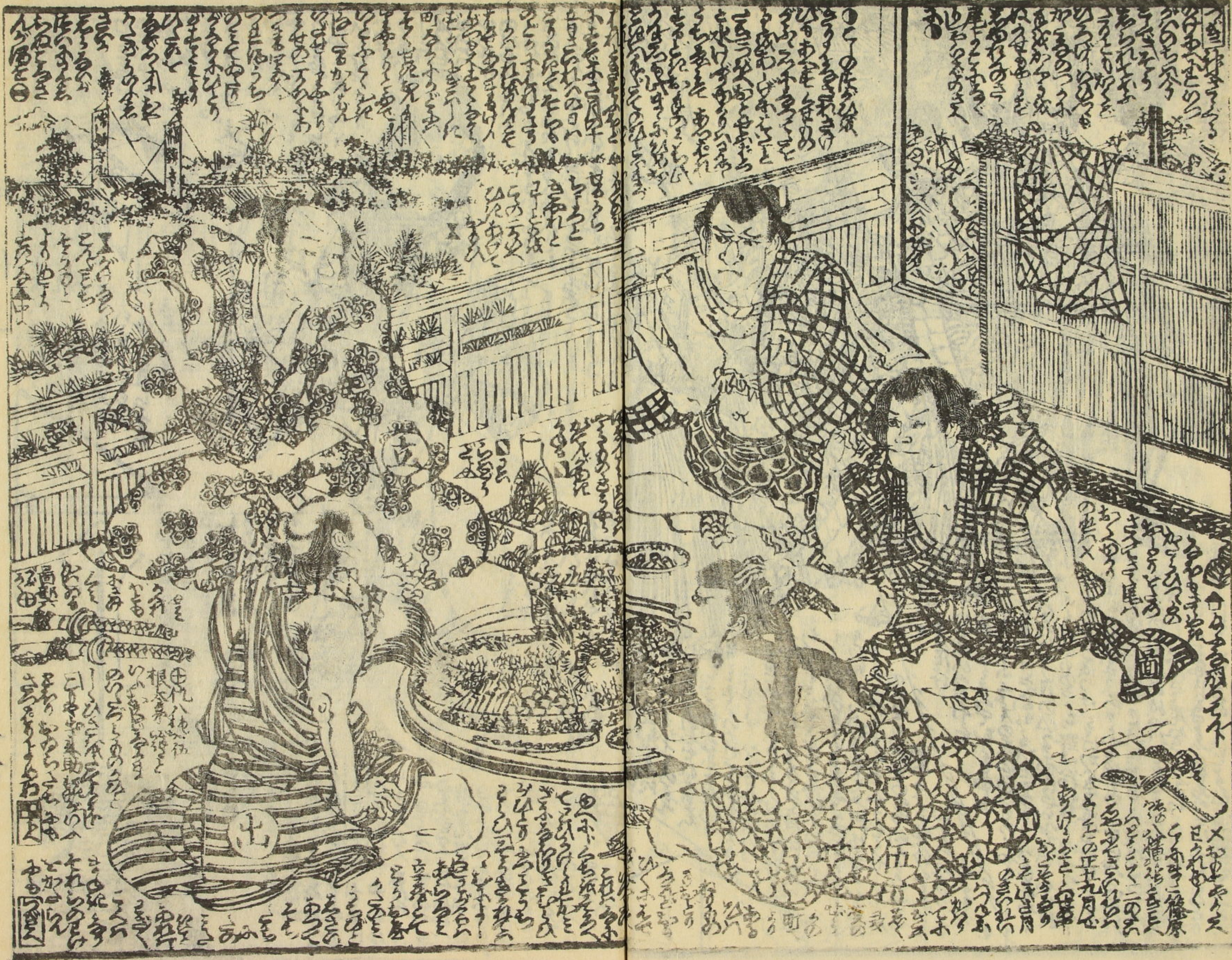
# 御祭禮

丙辰迺歲大當

箕田青洲浄書





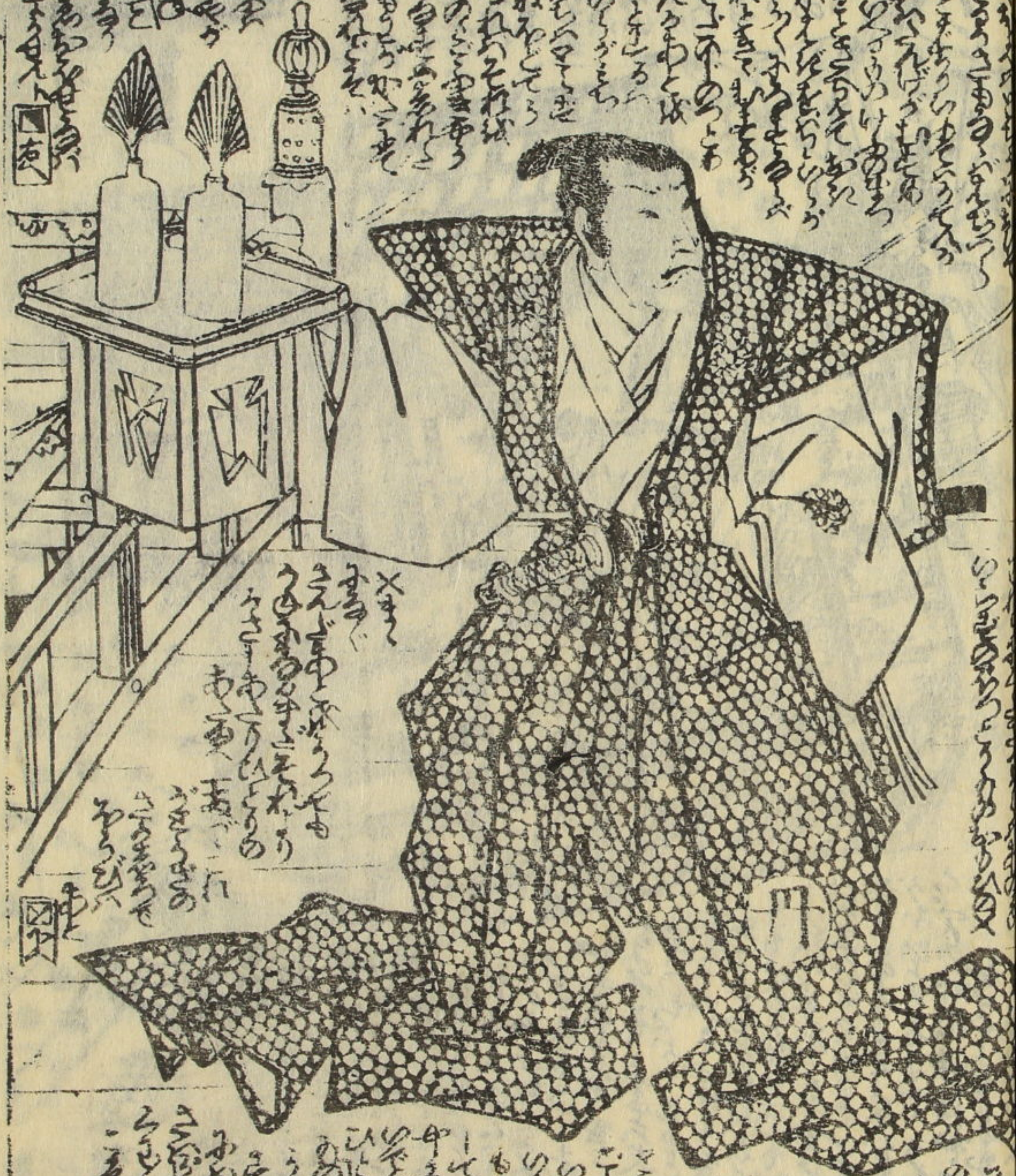


甲子

十五

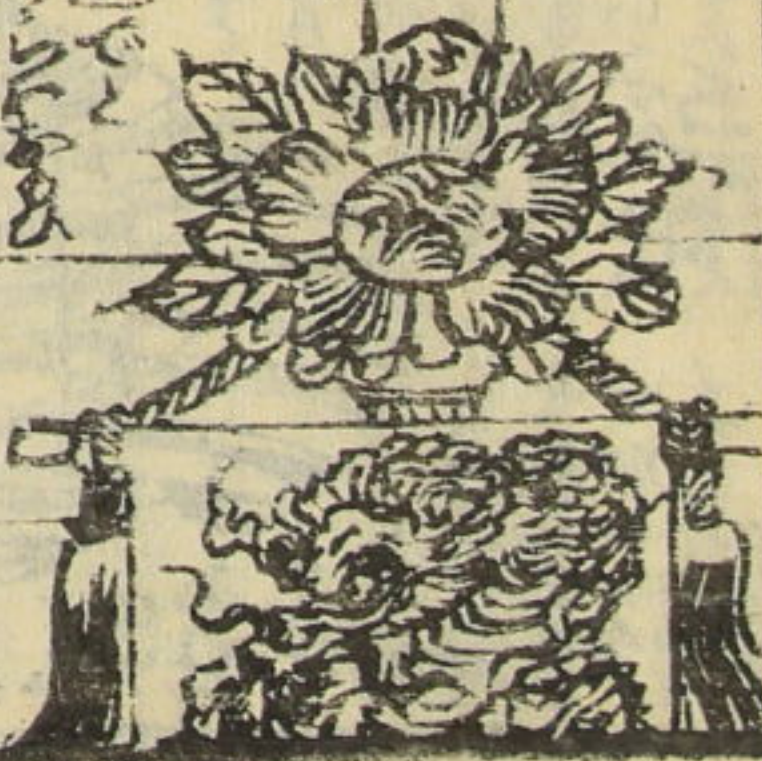
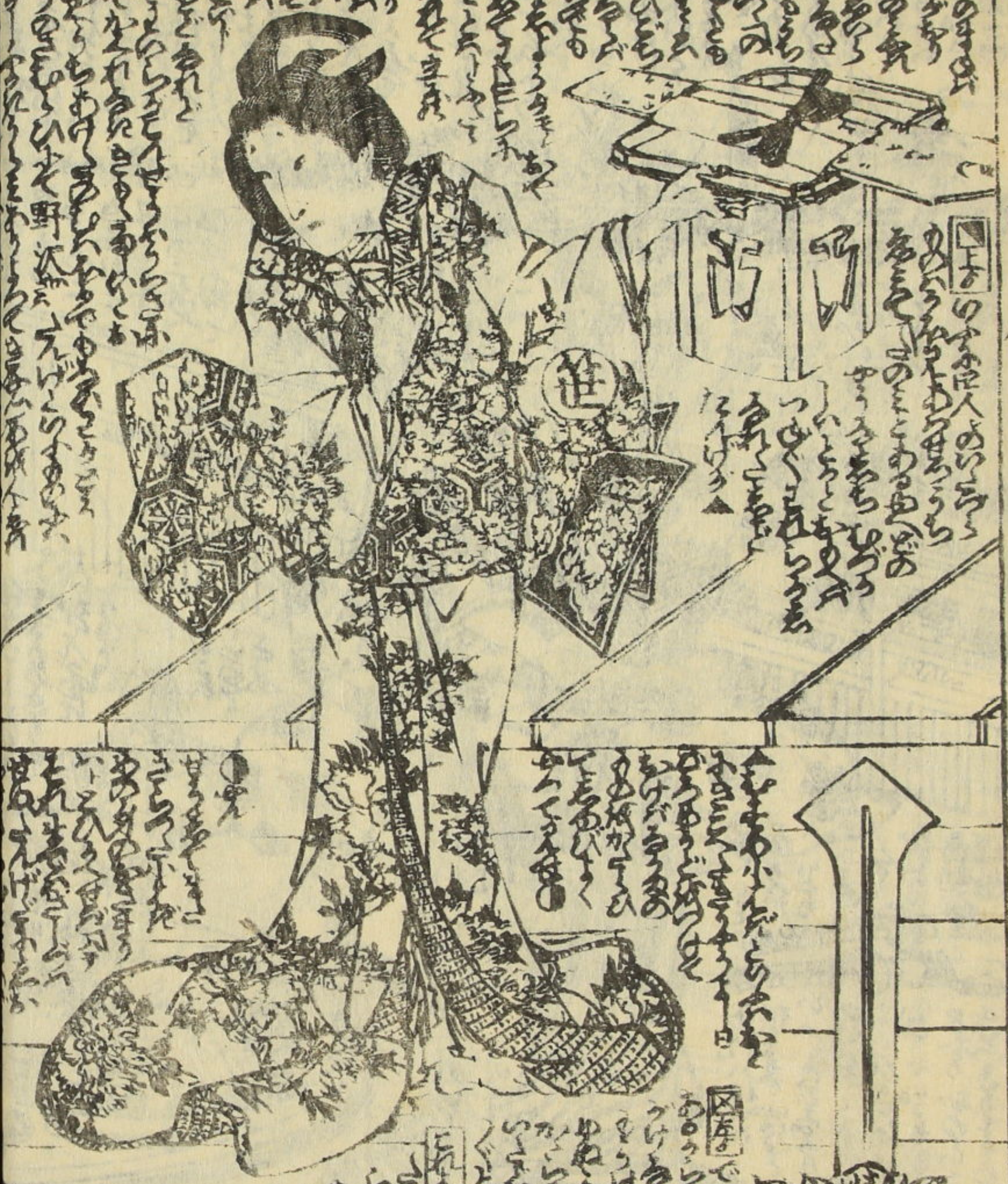
Handwritten text in vertical columns, likely a play script or commentary, surrounding the illustration of the man. The text is written in a cursive style.

寺



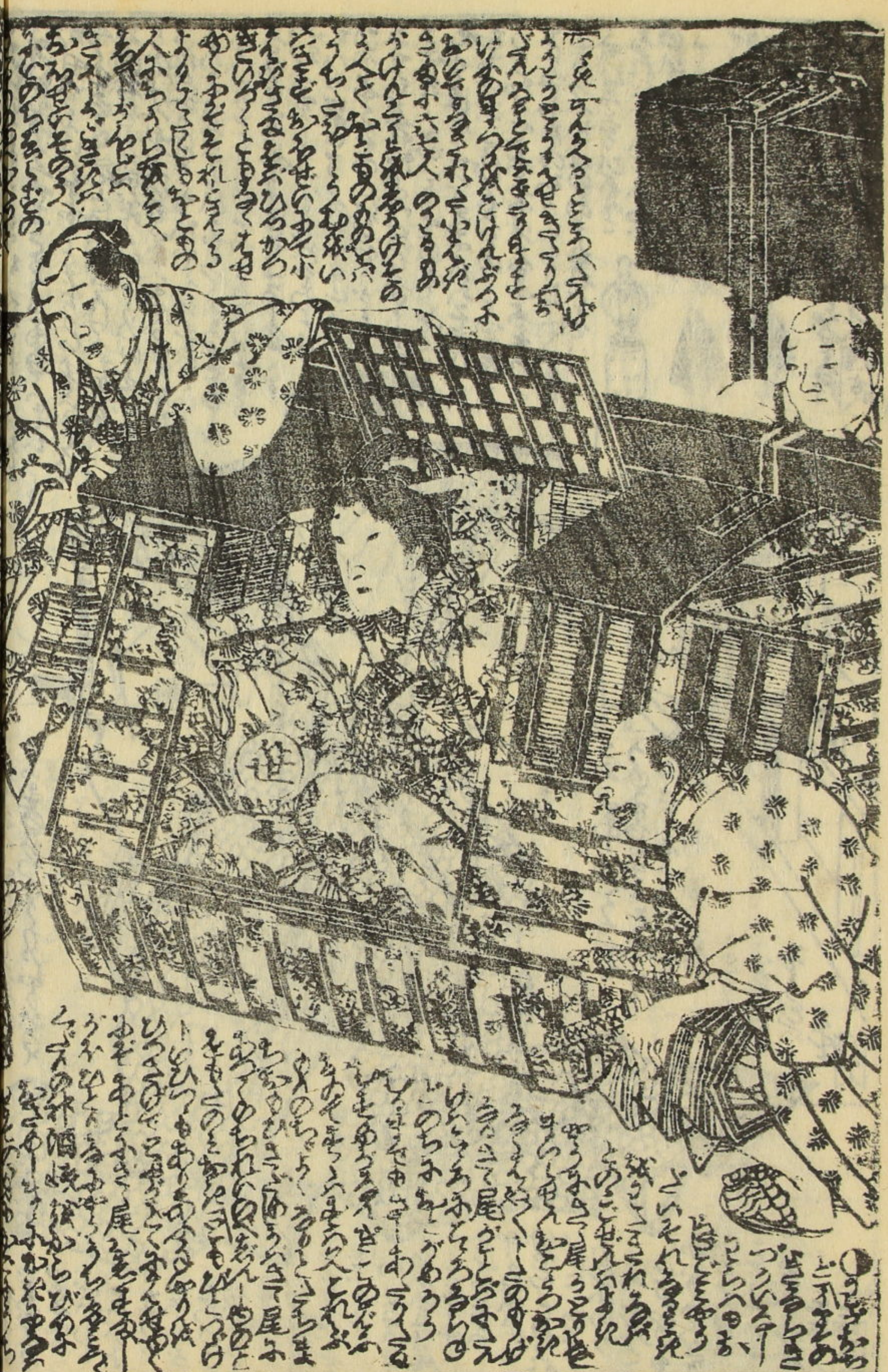
Handwritten text in vertical columns, likely a play script or commentary, surrounding the illustration of the woman. The text is written in a cursive style.

形代五





寺  
子



日  
生

七





二九  
 夫のたのしみは、ひたすら、わが身にまはせしむる事なり。
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...

...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...



...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...

...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...
   
 ...

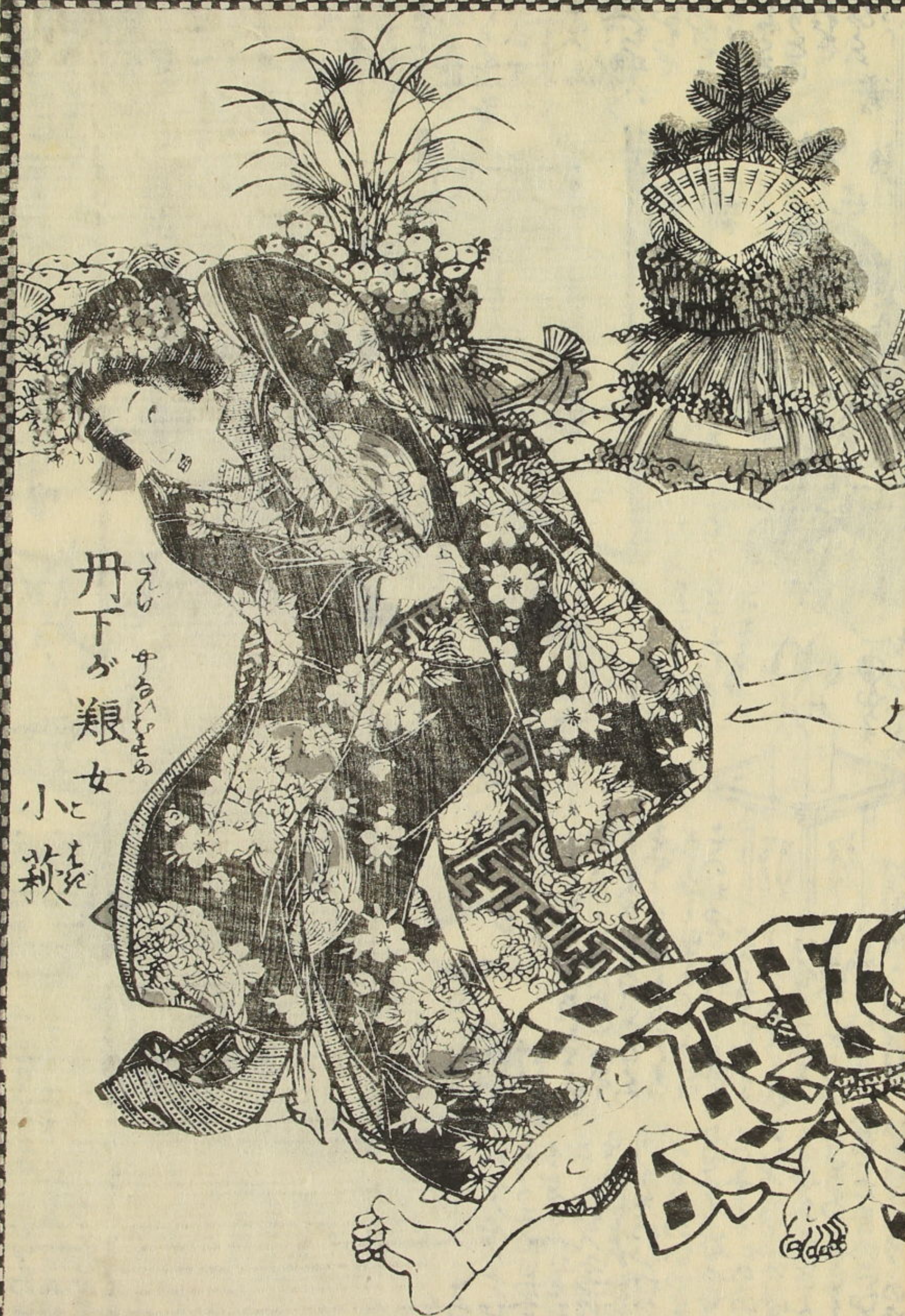




花沢本街の市客  
鳥屋万助

下喜作  
去奴

女兒  
思羽



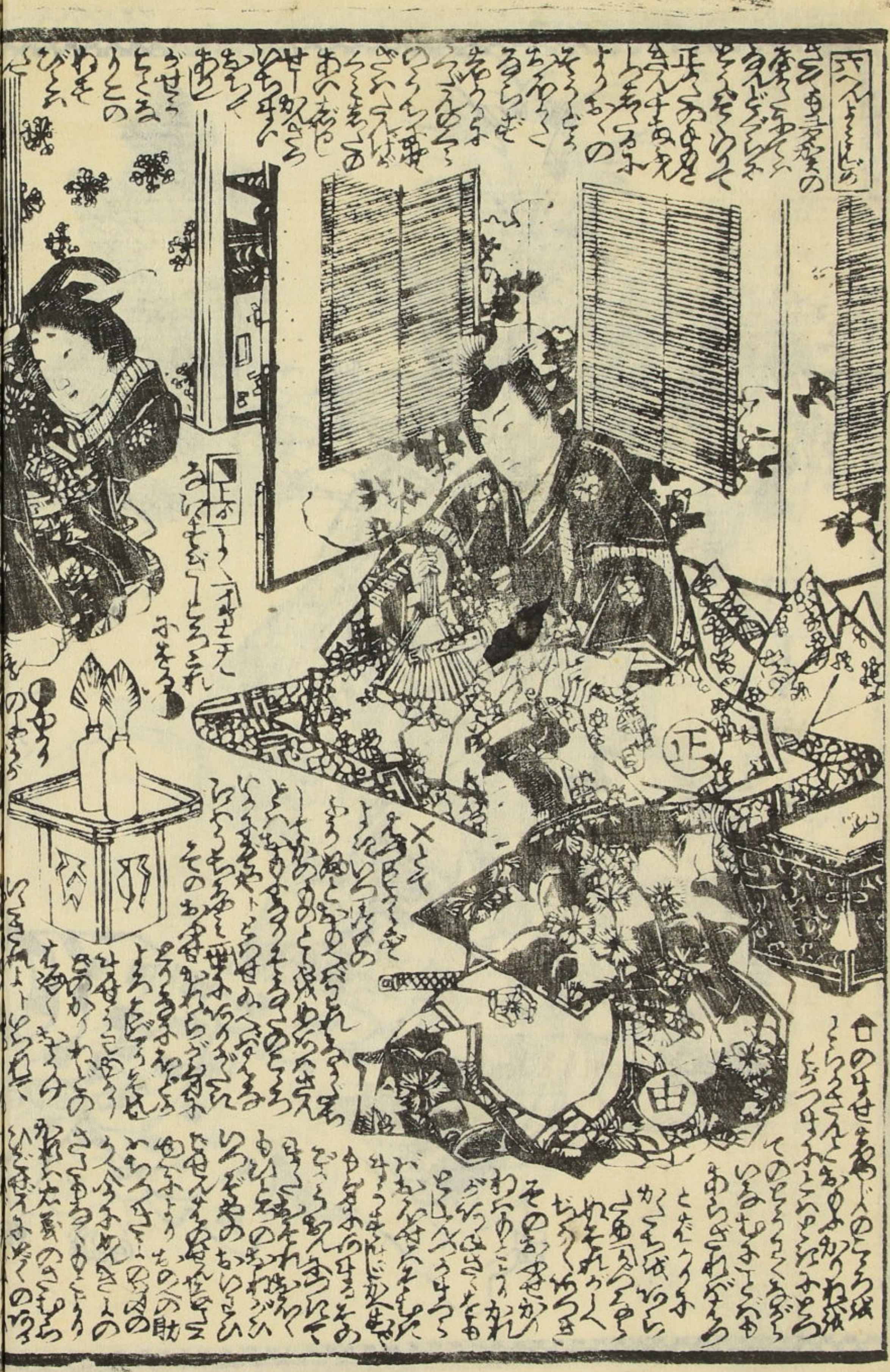
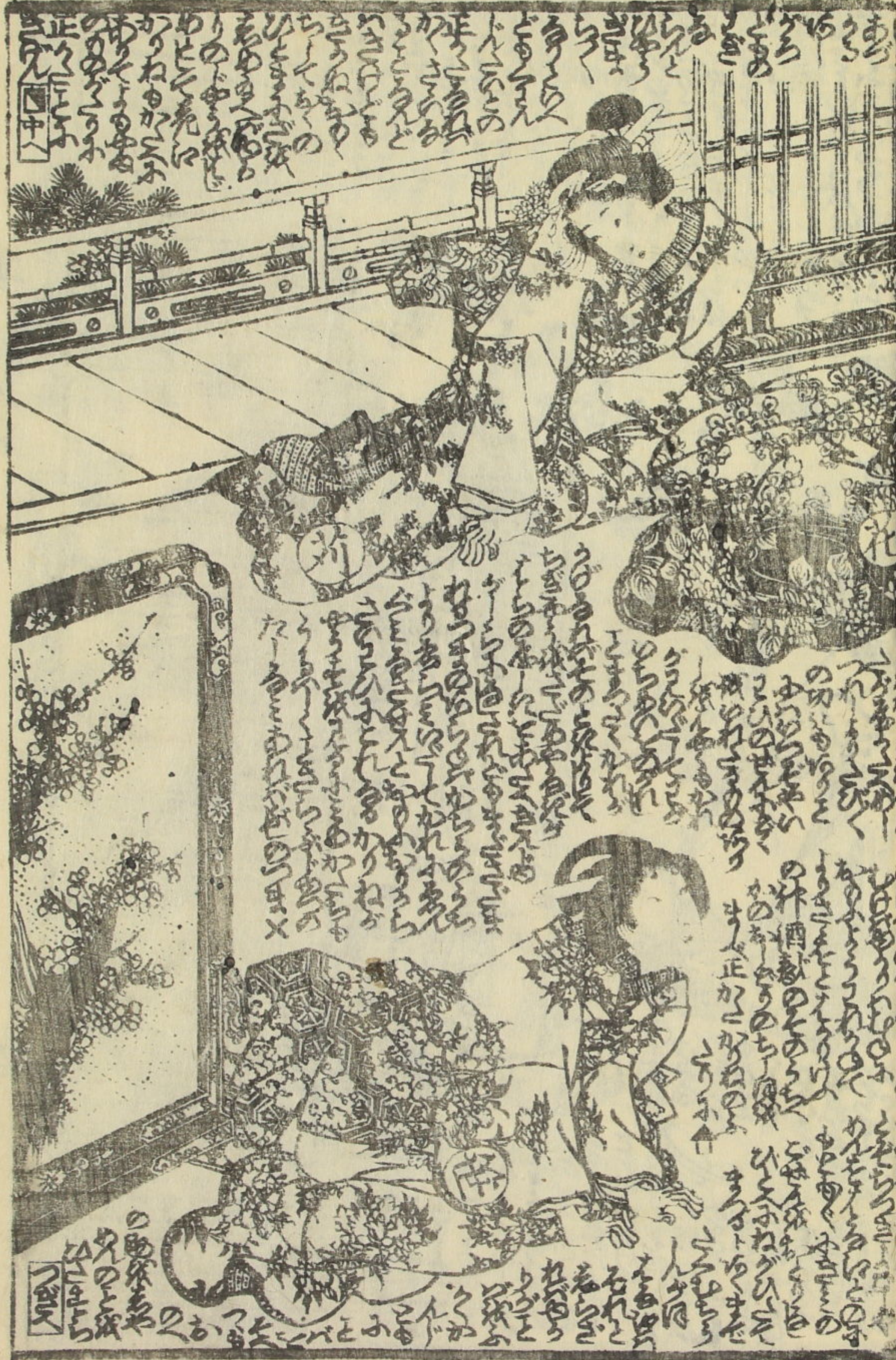
丹下が親女  
あまのつとめ  
 小萩



悪漢の  
 部圖

野澤の  
 要之助  
 光照





正  
中

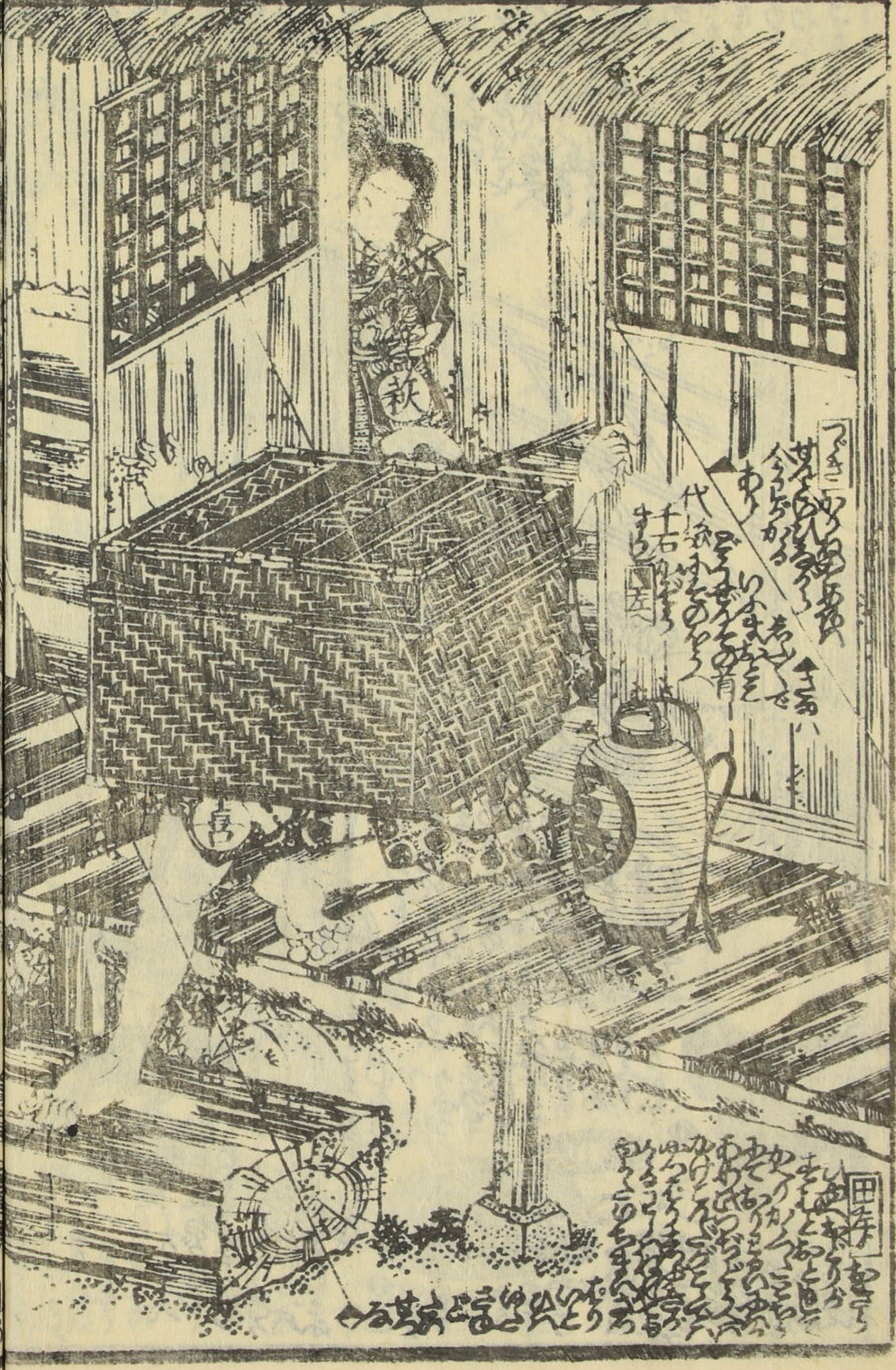
正  
中



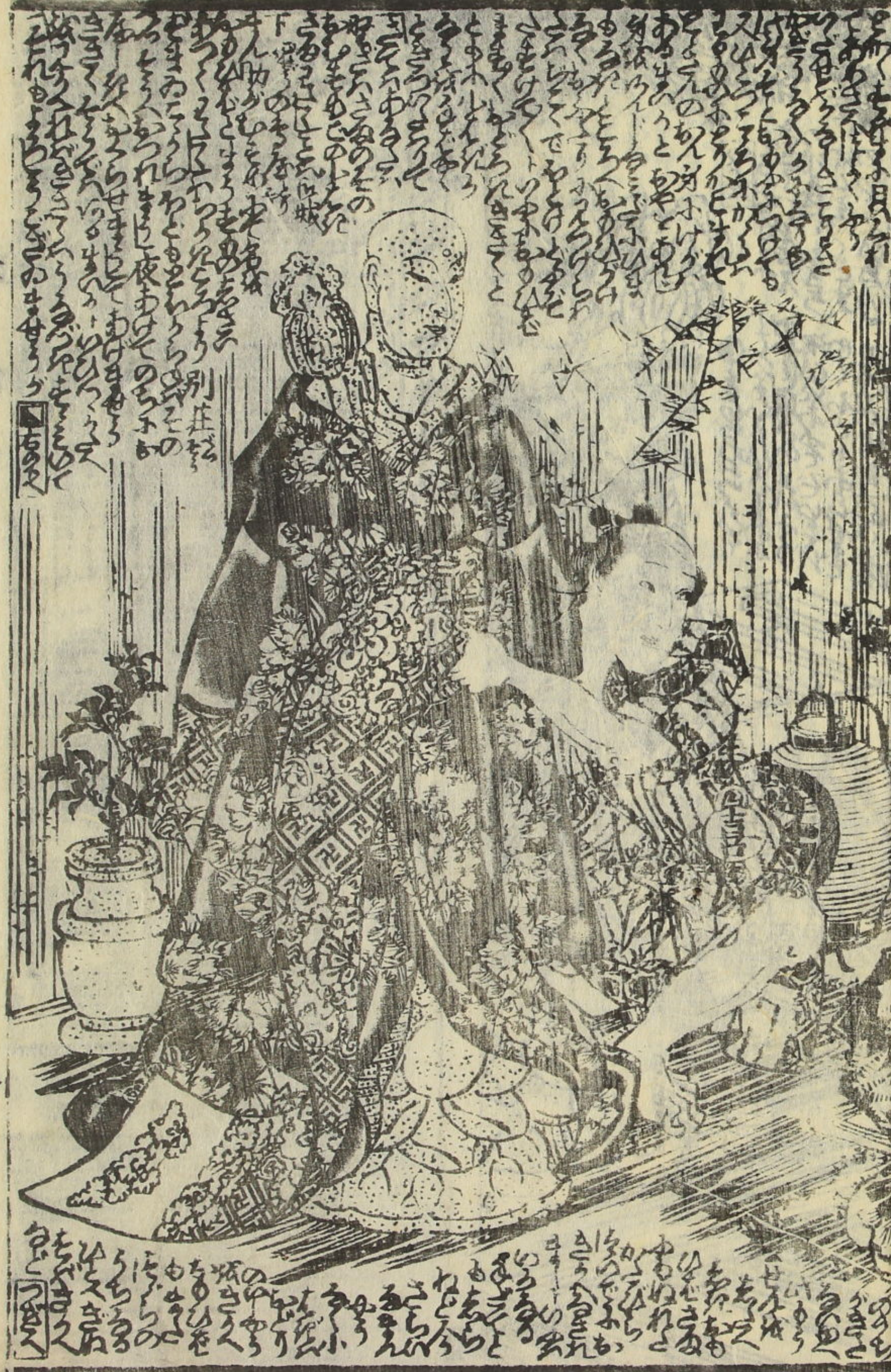
侍

七





Handwritten text in vertical columns, likely a narrative or commentary related to the illustration. The text is dense and covers most of the upper and lower portions of the left page.



Handwritten text in vertical columns, continuing the narrative or commentary from the left page. The text is dense and covers most of the upper and lower portions of the right page.





此の物語は、  
 昔の事であるが、  
 今も昔も、  
 人の心は、  
 変わらぬもの、  
 である。

石燈籠の  
 影が、  
 壁に、  
 映る。

女は、  
 涙を、  
 流して、  
 泣いた。

寺











寺

寺

寺

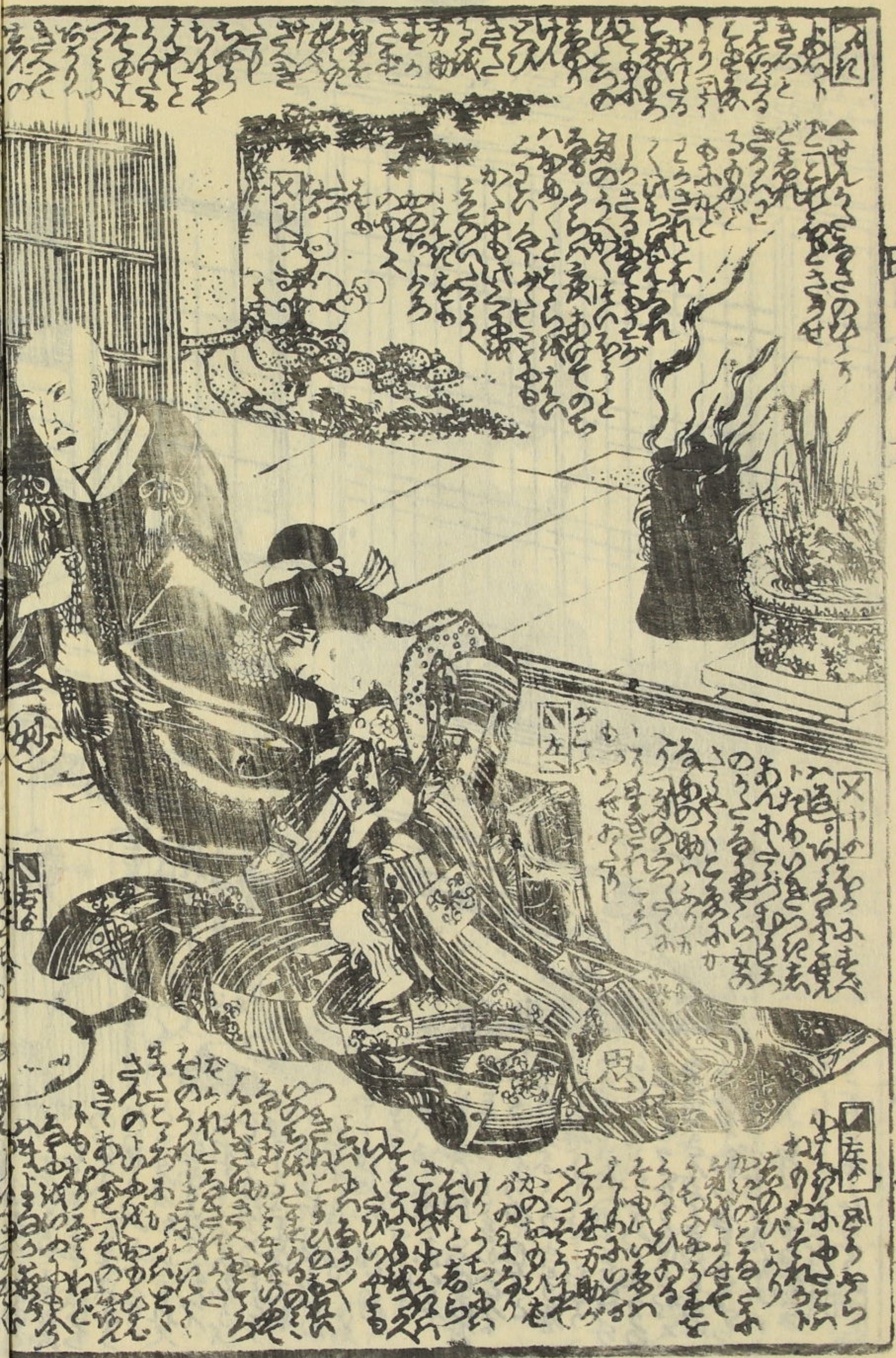
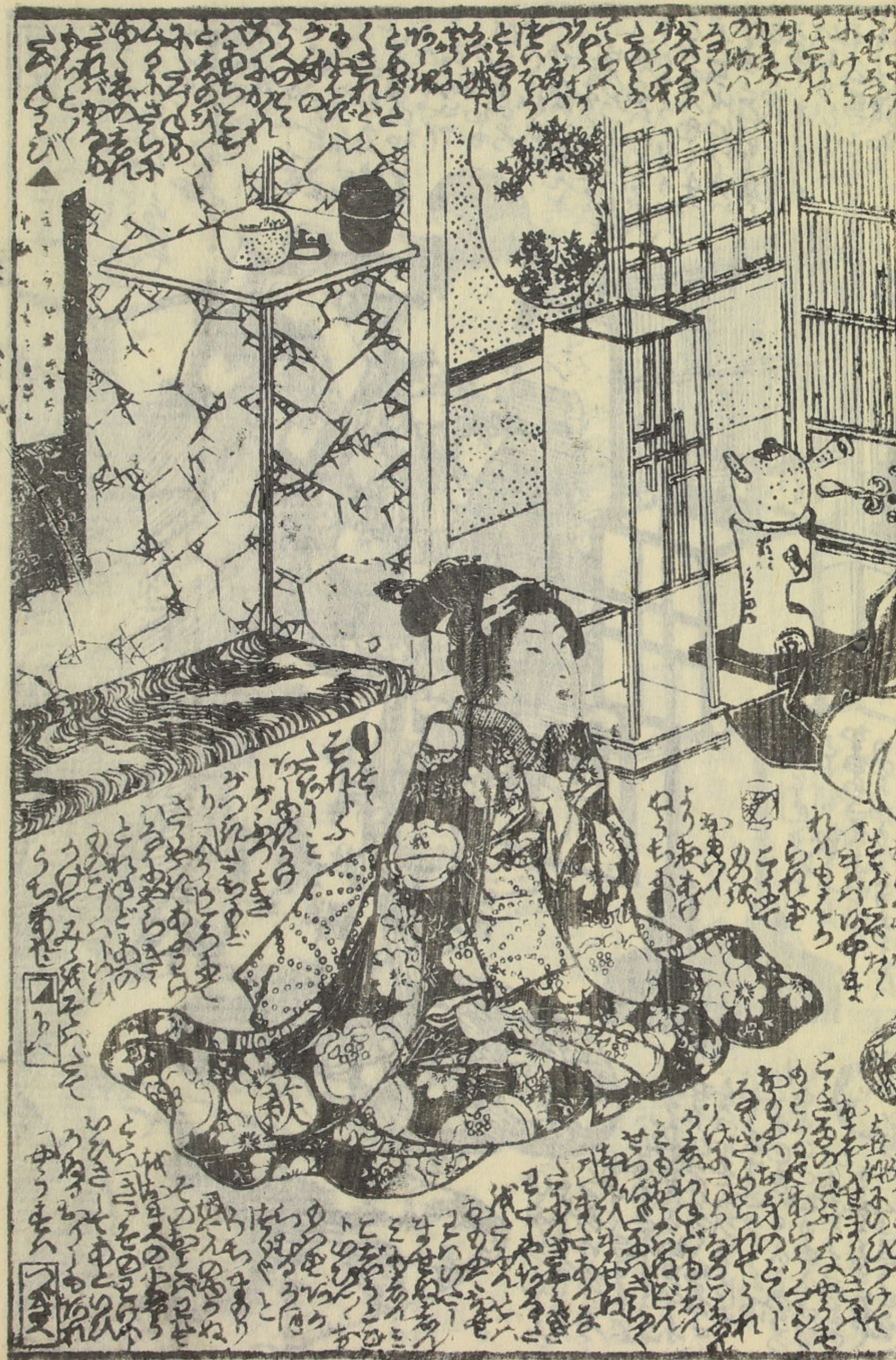
寺

寺









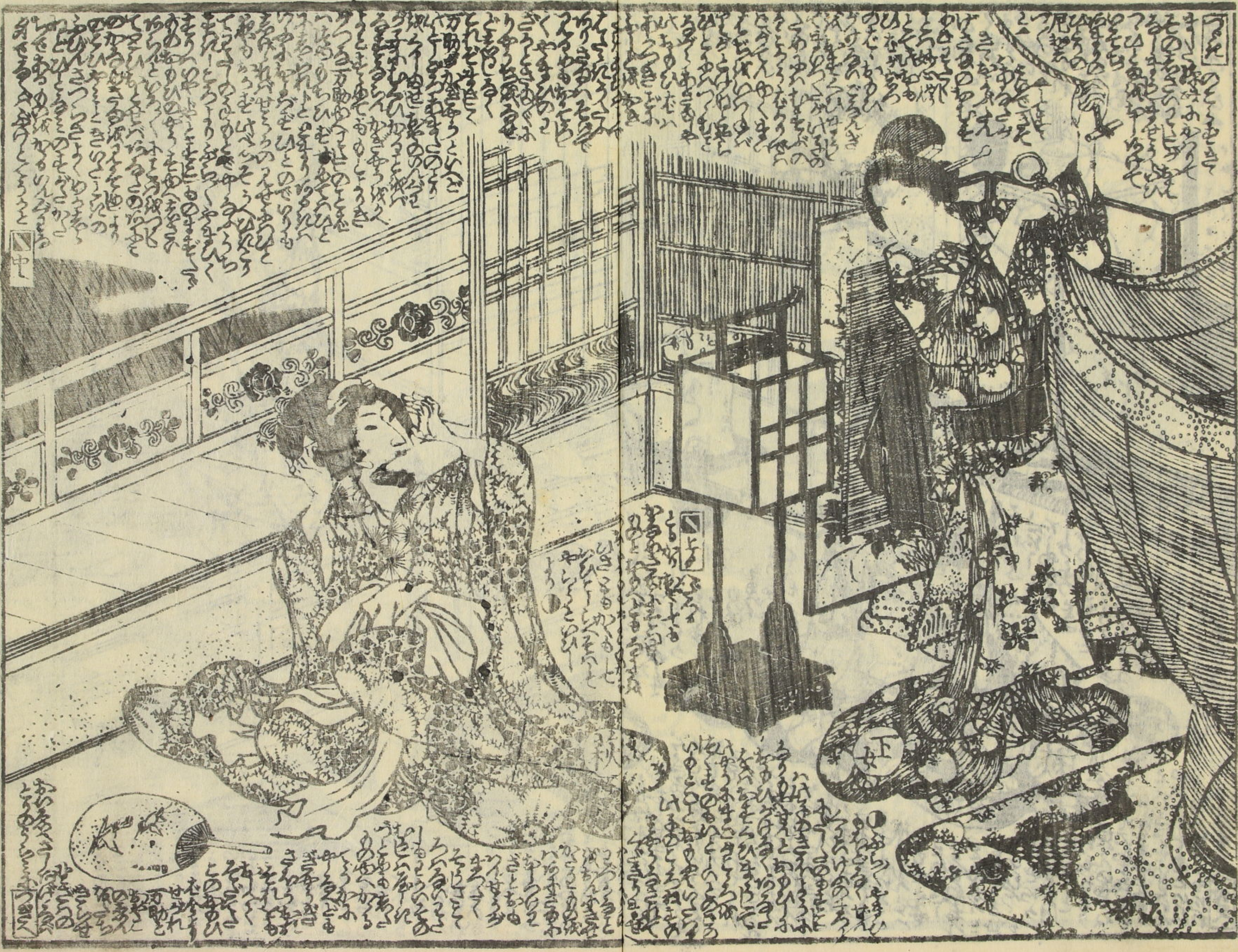
寺

井

11

つ

左



寺  
七  
中

中  
下  
下



二十

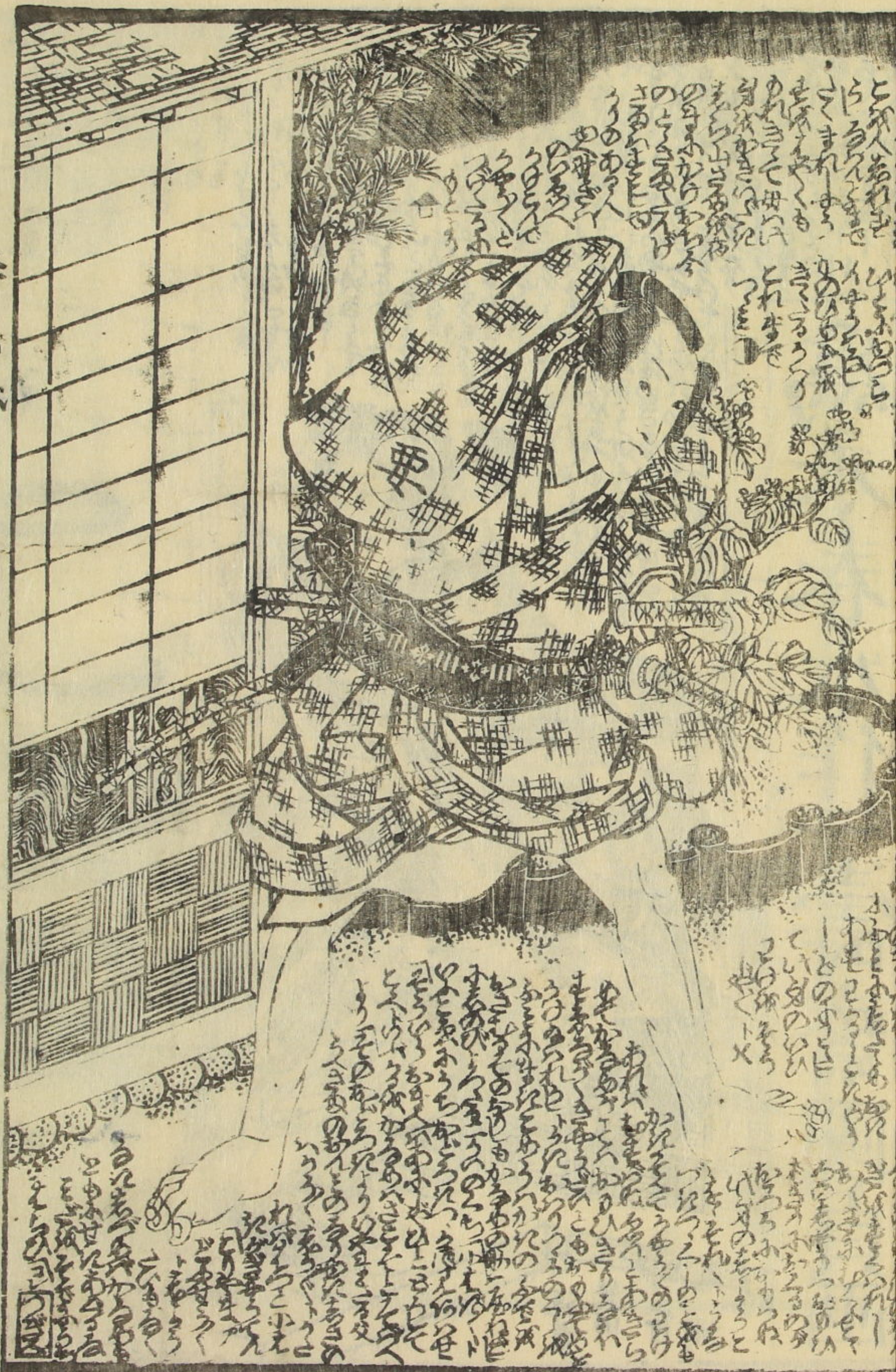
十九



廿

廿一





慶應三丁卯新年刻目録

北雪 美談

時代加賀實

廿六編  
廿八編迄  
葦市

為永春水作

歌川國貞画

雜談雨夜質庫

六編  
七編

為永春水作  
一陽齋豐國画  
門人 國久画

池園の語

初編  
二編

庭訓武藏鏡

山々亭 有人作  
歌川國貞画

應賀作  
國貞画

六編揃

地本草紙問屋 若林堂

芝神前  
若狹屋與市梓

為永春水作 一壽齋國貞画



洲青 美田 淨書

北雪美談

時代

加賀實

第六編

為永春水作

寐樂樓國貞畫

若林堂壽梓